

所用

第一集
圖書紹介編



教育研究所シリーズ

山形縣教育研究所

山形縣教育研究所



篇介紹書圖

次目

發刊の辞	玉岡 忍著 (一)
教育心理学	玉岡 忍著 (二)
近代教育とリブリズム	大田 堯著 (四)
精神衛の理論と實際	黒丸 正四郎著 (七)
教育社会学	西岡一義共著 (一〇)
中学校のカイダンス	下地惠常著 (一〇)
新教育の創造	二階堂 爲好著 (一一)
ホームルーム研究	WH キルバトリック著 西本三十二訳 (一五)
国語学習の入門	宮坂 哲文著 (一八)
教育的環境学について	石森 延男著 (二一)
学校学級経営の基本問題	山下 俊郎著 (二三)
児童觀察の理論と方法	武田 一郎著 (二五)
不良化傾向の早期発見	後藤 岩男著 (二八)
ガイダンス	牛島 義友著 (三一)
家庭科指導要義	小見山 栄一著 (三八)
子供を生かす学級指導	林 実元著 (四二)
カリキュラム改造—その歴史的展開—	倉富 崇人著 (四四)
生活カリキュラムと国語教育	梅根 悟著 (四七)
新制中学校と職業指導	小島 忠治著 (五〇)
あとがき	田中 意一著 (五三)
	(五六)

教育研修所シリーズ發刊にあたって

山形縣におきましても去る四月から「本縣の實情に即して教育に関する研究調査を行い、教育計画の樹立に資すると共に、教職員相互の研修により教育実践の向上に寄與する。」目的で形ばかりではありますが教育研修所が設置されました。研修所は一万縣下教員のものであるべきことはいふまでもありません。したがつて研修所は教員各位に奉仕の義務を負うべきものと信じます。かねがねその一つとして研修所シリーズ發刊の意図をもつていたのでありますが、ようやくその運びになりました。今後シリーズとしてはいろいろの性格のものを順次續刊していく計画であります。第一集として「圖書紹介篇」を發刊し大方の高覽に供することになりました。教育実践の上に何らかの御参考に資していただけますならばと念願している次第です。

教育心理学

本書に対して私は格別な関心をもっている。というのは私が学生時代に、教育学専攻ではあつたが心理学の実験の際には何かと著者の御世話になつたからである。本書を手にして私は著者が師範学校において教育心理学の講義を担当しながら本書の完成に努力されたことに對して心から敬意を表しつゝ本書の内容の一端を紹介したい。

本書はもとと新制師範学校の参考書として企図されたが、時恰も学制改革にあつた教育の心理的考察が要望され、一般教育実家向きにまとめられたものである。第一編は教育心理学の基本問題を扱い、著者自身の心理学そのものに対する規定づけをなしている。第二編の発達の実相においては、つとめて内外諸学者の研究結果にもとづいて記録され、著者自身の観察実験も加えられている。尙全体を貫いている学説としては、大體々制理論を根幹としているものの如くである。以下順を追うて摘録したい。

第一編第一章では心理学の意義が究明され「心理学は心身一体としての精神生活の現実を観察理會し、その間に横わる諸法則を發見し、予見統制以て人間生活をしてより理想的たらしめんとする学問である」と定義している。凡そ一つの学問がその独立性を得るためには、一定の目的と、一定の対象と、一定の方法とが必要である。心理学の対象は「行動」であり、心といつても究極においては心全体をさすものである。次は方法であるが、心理学をして科学的たらしめるもの

の最も顯著なるものの一つは観察の方法を取り入れることである。観察は自然的自己観察、自然的他人観察、実験的自己観察、実験的他人観察に分けられるが、観察上の注意として、(一)食入つて見る。(二)客観的に見る。(三)断片的でなく継続的に見る。(四)平常場面のみでなく危機場面をも見る等があげられている。尙位相観察法、條件分析観察法、臨界観察法、水準加工観察法、逃避場面観察法、障壁又は葛藤場面観察法、統計、理會が説かれている。理會は既にある部分の解剖的綜合的理解を超越して、全体的、洞察的、本質直観的な理解否理會でなければならないとしている。さて目的であるが、心理学においては究極目的においては精神科学的であり、手段的目的乃至方法においては多分に自然科学的である。又その対象は精神現象とはいへ、その生起においては多分に自然現象的であると同時に、現実を認めての理想体として眺めるのである。精神現象としての生命を忘れることのできない点からは精神科学的ともいえる。心理学は精神現象を自然價值を認める立場から自然現象的に観察し、記述し、説明せんとする対象と見ると同時に、その理想價值をその中に認めてその実現を計らんとする文化的学問の対象と見なければならぬ。かくて著者は心理学を單に精神科学か自然科学かの範疇に無理に押込めずに、これを科学的人間学であると主張している。

第二章は教育心理学の課題と方法を扱っている。教育心理学は

教育現象を心理的に解明し、以て教育的効果を大ならしむるを目的とする。それには先ず教育現象そのものを教育的見地より取扱わんとする心構えを必要とし、更にこれを教育的場に具節的(具體的、全体分節的)に存する凡ゆる立場より眺め明らかにし、最後に教育的方法をすらも與えんとするものと思われる。この第一の問題は云わば教師の心理である。教師は自らの中に心理学徒と教育者との渾然統一したものを感得しなければならず、そのために自らの心理を追求することが先決問題であるとしているのは卓見であろう。第二段は所謂児童の心理であり、児童の現狀とその発達過程とが心理学的に観察され且つ理會されねばならない。第三は教材又は教育的方法、條件の問題である。教育的場の時間的空間的構成のあり方を心理学的に決定すること、この中には凡ゆる教育方法が検討され、決定されねばならない。例えば学習過程の問題、成就の問題などを初めとして人的、場所的配列、教材の與え方、授業形態の検討、ひいては児童の活動に及ぼす外的諸條件(天候、喧騒、学校、社会及び家庭的環境の実狀)等が解明されねばならない。と同時に学習方法に即して、観察方法及びその処理法、智能検査、教育測定等の正しいあり方を決定しなければならぬ。かくして以上の三者が全く全体分節的に機能の相即的にあることの正しい理會が教育心理学の究極目的たる教育の効果を大ならしむることにならねばならないのである。要するに教育心理学は教育現象を心理学的に解明せんとする学問であることは論をまたないが、その理想として先ず教育の理念の心理学的基礎づけより出發し、それを立場として確持し、各々の教育現象を全体的關聯のもとに即事的經驗的に解明し、併せてそ

の結果はまた教育方法に対するよき指針を與うところの價值的積極的のものたるべきである。而して方法としては哲學的思弁も、歴史的檢証も、或は物理的、生物的、實驗的、手續きを大いに利用してこの目的のために凡ゆる科学的方法が用いられねばならないことは心理学全般の方法と相共に論を俟たない。教育の立場(理念)と教育現象の形態心理的把握(理解より理會へ)と児童観察学習指導等の方法(方法)とが正によき統合一致を見ることによって今後の我々の教育心理学は裕り多きものとならねばならない。

第三章は発達理論である。心理学の研究対象とする精神は少くとも第一次的には生活体としての人間、即ち生きた人の心であつて、哲學者や宗教家の問題とするような不滅な靈魂とか普遍的な宇宙精神ではない。従つて先ず第一に身体的に制約された心であることを念頭におかねばならないとして心身一体を説き、心理学発達の上から精神一元論、生理一元論、そして心身相即論に及んでいく。次に精神発達について素質説(先天説)、環境説(後天説)又は經驗説を述べ、精神発達は先天的特性を伸ばすこととなく、又單に外界の影響を受入れることとなく、正に内的素質と外的條件との輻輳(Reinforcement)によつて成しとげられるとしている。そして年齢的分類、身体的分類、分化、未分化、統一、シュテルンの分類などより精神発達を説いている。

第二篇が発達の實相である。こゝでは心身相即的な精神発達の見地から詳細に説かれている。精神発達は一般的分類であるところの乳幼児期、児童期、青年期の分け方に従い、而もそれらの單なる客観的叙述のみに終らずに教育的考慮を加味して極めて興味深い叙述

であるが、それらについての紹介は、あまりに資料が豊富であつてこの企図のもとではよくなし得るところでない。直接本書による研究をのぞみたい。

要するに本書は著者多年の経験を基礎として廣い見地から教育の基礎たる心理学的事実及び学説を究明し、体制理論を根幹として整

理して教育者に必須な心理学的知識を網羅している点は本書のもつ特色であり、教育実務家におすゝめできる良書である。(佐藤)

玉岡 忍著 東京 金子書房発行

定價二五〇円

近代教育とリアリズム

實學主義と本書の意義

近世教育の歴史を概観するならばわれは直ちに二大潮流の存することを認めることができる。理想主義的觀念論的教育思想と實學主義的實在論的教育思想との流れがそれである。一方が緯となり他方が経となつて相互に連関して發展し今日に及んでいる。

しかしわが国の教育思想、教育学説、ひいては教育実践においては、實學主義的教育が不当に過少評價せられてきたことは疑い得ない事實である。そしてこのこと自体がいわば日本的性格そのものに因由するもので精密な吟味を必要とするものである。ともかく實學主義教育の傳統を殆んど持ち合わせることもなかつたわが国の教育が、アメリカによつて紹介せられた新教育に當面して、或はその進歩性、その確かさに目を見はり、或はおのれと新教育との距離の大きさに呆然としてなす所を知らず、いたづらに混乱状態を呈

しているのが現状であらう。

新教育とはいふまでもなく實學主義教育の系譜の上に立つ。それは觀念論的な教育思想ではないが、しかし教育の理想性を拒否する立場ではない。いなむしろよりよき理想主義の上に立つともいえよう。新教育とは新しい時代をきり拓いて行くよりよき社会的實踐人を育成することを目標とする。新しい時代をきり拓くとは理想をかがけて進むこと、この理想の追求者たらしめるために一人一人の個人をして生きた具體的な力を、實學的なるものによつて獲得せようとするのが新教育でなければならない。

物の本質は社会的歴史的に精察することによつて得られる。新教育を眞實のものとするためには、アメリカ教育の單なる皮相的な模倣によつてなされるものでは断じてない。教育が古來社會の重要な機能として営まれてきたものであるからには、教育は社會との深い連関において、それがまた歴史の流れにおいて把握することが必要

である。社会的歴史的な把握のない教育実践は、一見はなやかであるうとも間もなく行つまりを生ずること必至であり、すこぶる危険なものと云わねばならない。日本における教育実践においてはこのことが特に考慮せられる必要がある。われわれはアメリカの教育をこのように把握しこれを日本の社會の現実のその歴史に照合することにより、始めて新教育を眞實のものたらしめることができると信ずる。

このような観点に立つてアメリカ教育を吟味し紹介する著書はまだ余りない。大田堯氏の「近代教育とリアリズム」はこの空隙をみたしてくる貴重な著書であり以下にその要約をこころみよう。

實學主義の系譜

——本書の要約

中世社會が宗教と結びつけて考えられ、近代がその所産である科學の發達によつて特色づけられるならば、實學主義の人たちは科學の發達と結びついて教育の近代化に努力貢獻した一群の人々である。本書の内容は三部からなり、第一部は初期實學主義の成立であり、その成立の地盤と、近代知性の先覺者ベーコンに學んで自然科学的思考方式を教育の理論と実践に導入したコメンティウスを論じ、第二部は十九世紀における科學教育論の成立で、近代自然科学の壯大な成果を積極的に教育に取り入れたスペンサーやハックスリーを中心として論じ、第三部はプログレシヴィズムの發展と實學主義であり初期プログレシヴィズムの教育觀と後期プログレシヴィズム——コ

ムミニティ・スクールの成立——の教育觀が中心問題になつてゐる。今日特にわれわれの関心せねばならぬのが第三部であることはいうまでもないが、以下簡略に全般にふれたいと思ふ。

一、初期實學主義の成立

初期實學主義は十六世紀の末より十七世紀に至る初期自然科学的發明の時代に成立する。その地盤は新興商人と手工業階級からなる都市の勃興、航海術の發達による遠隔地との貿易、諸産業の發達等の社會の下層部の活潑な近代化の運動にある。この時代背景においてベーコンの思惟の發生は必然的なものであつた。

コメンティウスの教育への寄與はベーコンの思惟をうけついで何よりも先づ自然的世界の教育への導入であり、具體的な事物・教授を強調した点にあるを説く。

二、十九世紀における科學教育論の成立

十九世紀に至つて自然科学の發達は目ざましくいわゆる物質文化の黄金時代を現出した。そこには封建的社會地盤を粉碎し、人智によつて自然を動かし、物質的生活を拡大し精神的自由を欲求する新興庶民階級なかくブルジョワージが存在した。知識は力であり自然科学が時代的にすこぶる重視された。スペンサーは科學教育の啓蒙者であり、ハックスリーは科學の教育への積極的な指導者であつた。スペンサーによる生活活動の種類の分析、教育價值決定の基準は最も有名であり、今日バージニヤのカリキュラム・プランのスコープの消源をなすものである。

十九世紀において始めて科學が教科として教育に重要な位置を占めたことはこゝで見のがすべきではない。

三、プログレシヴィズムの発展と実学主義

アメリカのプログレシヴィズムの発展はアメリカ資本主義の発展と民主主義をはなれては考えられない。

一九二〇年代にいたるアメリカ教育は全面的に教育の科学化を遂行したが、その中に二種の類型を見ることが出来る。その一はソングイク一派の科学的決定論であり、教育を企業とみなし、教育的企業の外的な環境条件に合理性と科学性をとり入れることによつて、生産条件のエフィシエンシーを促進することに重点をおいた。彼らは物理学に範を求めて教育の諸現象を量的なものに還元し、最も有効かつ合理的な教育企業形態を生み出そうとした。他はデューイを先頭とするプログレシヴィズムの一派である。理論的背景は生物学的見地―成長―において人間の経験の発達をみるプラグマティズムである。彼等は子供の全人的な発達を期待し、子供の活動（興味）を重視し活動的学習（Learning by Doing）を原則とする。成長は現在を完全に生きることによつて可能であるとし、児童中心の教育を強調する。この派の特色は、具体的には生物学的「生長」の概念を基礎としながら、自由、活動、個性を尊重する極端な個人主義の助長である。

一九二九年に始まる経済大恐慌は、繁栄の絶頂にあつたアメリカ社会を混乱と絶望に陥れた。これがアメリカをそしてその教育を極端な個人主義から「社会」を見出さしめた。本質的なデモクラシーとはデモクラチックな社会統制を前提とすることを発見せしめたのである。プログレシヴィズムも「教育は本質的に社会過程である」こと、「教育の計画化せられた社会過程のインボジション（賦課）

である」ことを認識し、教育は社会的知性による実践的社会改造者の育成であることを強調するに至つた。

このような社会の発見がプログレシヴィズムをして、コミュニティ・スクールを提唱せしめるに至つたのである。コミュニティ・スクールは、個人と社会を統合（インテグレート）した既存教科を統合（インテグレート）するところの生活中心の学校であり、課題の学習（Community project）を中心方法とする。

実学系譜においてコミュニティ・スクールは、（一）近代科学に立つ知性と（二）その現実の場における民衆の実践と（三）すべての民衆の福祉とが教的形態成立の基本條項だとしてゐる。

若干の感想

歴史的社会的な考察はこの書の特徴であり最もすぐれた点である。コア・カリキュラムがコミュニティ・スクールにおいて必然的に生起すべきであつたことも不徹底ながらも暗示されている点も注意するべきである。なお慾を言えば、社会と教育の連関をもつと具体的に堀り下げることに、さらにプログレシヴィズムとエッセンシャルリストとの関連の考察がなければならぬものと思う。なお同氏の「地域教育計画」を併読すべきであらう。（船山）

大田 堯氏 著

（A5判、福村書店刊、三二〇円）

精神衛生の理論と實際

(一)

終戦後の混乱を極めた教育界も今や新しい教育理念が樹立され、新しい学校の望ましい姿も明らかになった。またこの理念に到達するための新しいカリキュラムの研究、ガイダンスの実践に日々眞摯な研究と努力を傾け、あらゆる教育的困難を克服しようと力めている。しかしわれわれはここで十分反省しなければならぬ。われわれは新しい教育の流行を追い、華やかな形態を早急に求めようとする嫌いはないだろうか？明治以後の日本の文化を考え、また教育の展開史を顧みる時特にこの点を強く反省させられる。いつの時代に於てもまた如何なる理念による教育に於ても、教育の主体は被教育者の児童生徒そのものでなければならぬ。カリキュラムもガイダンスも結構であるが、これと並んでわれわれは先ず児童生徒の研究に徹するところがあつてもよいだろう。このような立場からこの「精神衛生の理論と實際」を繙いてみたいと念願した次第である。

(二)

従来の教育は児童に知識を授け技能を習熟させることであると考えたが、今や教育の理念は根本的に改められ、児童の心身の円満な発達を助長し將來立派な一人格として社会に適応し社会的に正しく行爲して行けるように指導することであるとされた。しかし現実の子供達を顧る時心身は蝕ばまれ、彼等の心は日一日と学校から離れようとすることが少なくない。勿論これは社会的経済的事情も大きく影

響しやうが、われわれは只「社会の責任として済まされる事実である」か。これというのも教育者に児童の現実を直視し、その本質を具体的に把握せんとする地味な基本的努力が缺け、いたずらに現実から遊離した抽象的理論化へ走らんとする傾向があるからではないか。新しい教育は先づ科学的にして具体的な児童研究から推進しなければならぬと著者は叫んでいる。児童の異常なる行爲は何らかの人格的な障害のために起つた社会環境への調整の失敗であつてその原因の客観的診断にさかのぼつて治療と再調整に向はなければならぬ。しかもこの問題は單に異常児のみでなく、成長しつつある児童の人格的発展は何れも微妙な力動的な構造聯関の中にあるもので、教育者は日々の教育的実践の中に具体的な本質を把握しなければならぬと言つてゐる。

児童をのびのびとした健康な精神に育てるには如何にすればよいのか。の解決が精神衛生の課題であり、それは児童の生活調整と人格の統整を指導する生活上の指導原理である。この目的のため精神病理学、心理学の遺傳学、社会学の如き種々なる立場から、児童の精神や身体に関する詳細な検査を進め、その所見に基づいて児童の調整状況に対する正しい診断を下すのであるが、如何にすればよりよき精神の健康を増進させることが出来るかという積極的な任務をもつものが精神衛生である。と。繰り返して述べてゐる。

(三)

人間の環境に於ける適応或いは調整の問題を考察する場合先づ第一に明らかにしなくてはならないのは行動及感情の問題であるとし、行動と感情の本質を究め、その発達について詳説している。ついで環境をとりあげ、それはわれわれを容れる単なる容器の如きものでなく、われわれにまつて意味をもつもの、即ちわれわれの行動を誘発したり妨害したりする力動的な場であると見做している。そして自己と環境とが均衡を保ち主客同調し、生き生きとして生命の躍動に溢れている状態が「良き調整状態」である。しかしわれわれと環境との間にはやまやまとする調整を不可能にするギャップが生ずる。

このような場合これを打開するために多く意味的乃至知的努力がなされるもので、かかる解決過程を「学習」と名づける。と学習をとりあげ、ここに試行錯誤・條件反射・洞察等について心理学者の所説を引用し説明を施している。さらにわれわれは新しい状況に於ける課題を解決する毎に一步一步新しい状況に対する調整を修飾しこれを習慣化して行く。しかし環境は常に変化し状況は絶えず移動する。そして調整は常に新しい問題となつて我々の眼前に展開される、生活とは実にかような調整を中心とする意識的・無意識的努力の連続であり、成長とは身体の成育に伴う身心の調整力の増大を意味する。調整は実に生活にまつて最も根源的な問題であると、重要性を指摘し「教育者は児童の調整状態に対し客観的視野を持ち、不健全な調整を発見したら直ちに再調整の処置を講ずると共に、一般児童に対しても積極的により良き調整へを指導しなければならぬ」と結んでいる。

次いで調整における種々なる機制を (一) 防禦による調整 (二) 補償

機制 (2) 同一化の機制 (3) 擬態的自己修飾 (4) 合理化の機制 (5) 回避による調整 (1) 反抗拒絶 (2) 逃避的機制 (3) 空想白日夢 (4) 退行的機制 (5) 抑圧による調整 (6) 病的轉換による調整、(6) 不調整状態。の項目に適切な説明を施しているが児童研究の立場から参考さなるところ多いであらう。

(四)

人間は最も無力なるもの、未完成なるものとして世に生れ、身体の発育に伴い環境への調整様式を一步一步休得し、身体的・精神的統一として成長する。この統一的生活体としての人間は遺傳的に限定され、環境的に形成されるものであるが、同時に積極的に自ら環境を創造し調整を保とうとする自覚的な生活の統一者である。と人格を規定し、さらに個性性格に言及している。つまり人格形成の要素として遺傳的素因と環境の因子が考えられ、また人格構造の上から身体的な面と精神的な面があり、人格が常に発展しつつあるものとして動的に考えると、個体発生的及系統発生的意味を含む人格発展の層的構造が明らかになる。しかし人格は決してかかる要素及層の單なる綜合としてあるのではなく、むしろかかる種々なる面として可能ならしめる自覚的統一体として存する。と全般的な展望を試み、次いで (一) 人格形成に於ける遺傳の問題、(二) 人格形成に於ける身体的基礎、(三) 人格形成に於ける環境の影響 (1) 家庭環境、(2) 地域環境 (3) 学校環境の項を取りあげ詳細に分析している。

(五)

人間のあらゆる行動や感情の基は調整の如何に存する。一つの場面における調整の失敗は更に次の環境への調整を困難ならしめ、人

格の発達に否められ異常的な性格を形成するにいたる。調整失敗の原因は (1) 個体自身 (2) 環境 (3) その両者に、分けられるが精神衛生に於ける調整の状況の診断はかくの如き個体と環境との間の落差の判定であり、また不調整児に対する再調整とは落差を均衡化し調和をとらせることである。われわれは恰も良医の如く原因と状況との両面に細心の注意を拂い、問題児の本体に鋭い眼を注がねばならない。そして子供らの生活現実を吾々が予想する以上もつともつと複雑であることを強調し、問題児を (一) 身体的欠陥をもつ児童、(二) 精神的に欠陥をもつ児童 (三) 環境に問題をもつ児童に分類し各々について詳細に説明している。しかしわれわれの所謂問題児はこれらのものが多いと復雑に組み合わされているもので、單なる一要素だけのものではないことを銘記しなければならないだろう。

(六)

精神の健康を増進しようと思えば、人格の構造を理論的に研究すると共に、人格の力動的な機構を具体的に把握しなければならない。そして実際の指導面に於いては男女の別、或は幼年、青少年、壯年、老年等により、それぞれ心の構造に差異があり、応用部面にしてもその環境のもつ意義により家庭、学校、職場、一般社会等、それぞれ異つた重点が置かれなければならないので、精神衛生について一般的な考察は困難であると指摘し、こゝで特に学校と家庭に於ける面を取扱っている。

(一) 学校に於ける精神衛生については、小学校組織全般に対する精神衛生的顧慮として、

(a) 学校管理の精神衛生的顧慮、(b) 教科課程の問題、(c) 分級 (グルー

プ編成) の問題 (d) 教師論 (e) 教授法 (f) 教科外活動 (g) 身体衛生。

(2) 児童の個人的精神衛生として、(a) 児童観察、(b) 児童との面接、(c) 児童との会合、(d) 両親との面接、(e) 調整調査、(f) 各種心理検査及身体検査、(g) 総合的記載。

(3) 問題児の事例研究。と詳細に説明している、(一) 家庭に於ける精神衛生については、人格の基礎には遺傳的素質身体構造があるので優生学的指導の大切なことに触れ、また胎児期より学令期まで詳しい説明を施している。

子供は新しい状況の一つ一つ征服して調整を学びとるが、自力で完成したときは自ら満足するだけでなく大人の批判と賞讃を期待するものである、したがって大人の示す態度が非常に重大な影響をもっていること、更に物事に失敗した時や、困難な状態に陥つた時の態度などにも言及している。そして精神衛生は何か普遍妥当な道徳律のようなものを説くものでない。各人の個性に基づいて各人がより自主的且積極的に調整を保つて行けるように指導する一つの技術である、即ち各人は失望、劣等感、罪悪感の如き消極的、敗北的情緒を出来るだけ避け、勇氣に満ちた生活を遂るよう指導するべきであると結んでいる。

黒丸正四郎著 黎明書房

(木島)

教育社會學

教育の民主化と社会的人間の形成は、その当然の要求として、教育社會學の研究を促すのである。從來の日本の教育に於いて、人間形成の社會面がおろそかにされていた。これは單に教育の罪と簡單に結論づける訳には行かない。民主主義が發達した社會構成をしてゐる國程教育社會學が發達している。アメリカが最もこの研究が盛であり、進歩しているのは、實証として、考慮に價する。全体主義の社會、封建的社會に於いては、民主主義は入れられない、それで、人間の社會性の形成はそれ程痛害を感じないので教育に於ける社會學研究も興らないのである。從來の日本は斯様な狀態に置かれてあつた。それが終戦後の民主化と共に、個性教育、社會性教育が叫ばれ、教育の重大な目標になつた。個人としての社會人と社會人としての個人、この二律背反的存在としての人間形成が教育の對象とされる点に於いて一個性と社會性が交流し融合して、一個の人間形成が行われるので一教育に於ける社會學の研究は欠くべからざるものとなつた。著者の言を藉りれば、「人間は個人的方面と社會的方面を含む所の矛盾的統一である」と言つてゐる。この矛盾を一個の人間の中に止揚して、統一する所に、民主社會の健全な發達と隆昌がもたらされるのである。この矛盾の統一を教育上如何にして成し遂げるか。この解決の方法として教育社會學の研究が欠くべからざるものとなる。コムニティ・スクールの建設にとつて第一に必要なものは、學校教育と社會が、二者一体となつて、別個の存在として、

無關係に獨立しないことである。本書は學校教育と社會の一体化を如何にするかを具體的に、詳細に論述した良書である。私が心から本書を皆様にすすめて、止まないのは、新教育建設途上に迷う者の一人として、本書によつて啓蒙された私の體驗からである。

第一章社會と教育に於いては先づ社會の概念を定義してゐる。社會は矛盾の統一として人間によつて構成されるものであると定義し、この基本概念に基いて、第二節に於いて教育の社會學的意味を述べてゐる。そして學校の教育的意義を「社會の現實に即して次の世代に社會文化を傳達し、彼等を社會化する」と共に、新しい社會創造の原動力となす役目を有する（一九頁）に見出している。第三節教育の社會的機能に於いては、社會的人間と職業的人間の共存の上に社會が繁榮することを叙し、近代市民社會の特質と教育の關係に及び民主主義教育の本質を明かにしてゐる。

第二章教育社會學の概念は三節に分けて、意味、歴史、課題の三項にし、「教育社會學は種々の社會制、社會集團、社會過程等に基づく様々の社會的諸關係の中に於て、又それを通して個人が經驗お習得し且つそれを組織する色々の社會關係を叙述し、説明する科學である（四八頁）」と定義し、歴史の項に於いてはアメリカ、フランス、ドイツ、日本について説明し、實証的立場よりその本質を明かにし、三節に於いてはその課題として、社會機能の一つとしての教育は社會の理解を必要とする。従つて教育の目的は社會的に規定さ

るべきを論じ、社會的目的を有する教育に於いてはカリキュラムの社會化を必要とする理由を明かにし、カリキュラムの社會化を合理化することこそ、とりも直さず、一切の科學を全體の文化生活に役立てる條件となる（六九頁）と示唆してゐる。

第三章は第一節で社會調査に必要な科學性を強調してゐる。社會調査の概念について論じ、ソーシヤルサーヴェイとソーシヤルリサーチに分け、理論的立場と實用的立場の相違によることを明確にした上、要するに社會調査と社會現象の科學的研究（七四頁）と基礎的解釈を與えている。調査には科學的態度の必要性を強調し、その具體的方法に及んでゐる。第二節には資料と觀察法を詳述し第三節は調査の方法と技術について語つてゐる。第四章 社會と學校の教育調査。第一節環境と學校教育はアユーイの説の展開とクラークの社會分析を基本としたものと見てよい。第二節社會施設としての學校調査、第三節學校内部の調査は學校經營にあたる校長としては熟讀銘記すべき項である。第五章、教育と社會過程に於いては遺傳的素質と環境としての社會の關係を述べ、第二節は歴史的過程としての社會と教育を論じてゐる。これによつて民主主義社會と教育が明かにいかなる關係にあるかが証明される。社會はその構造的矛盾と、その矛盾を條件とする人間の自覺の二つを推進力として發展すると結論を下してゐる。（一七七頁）

第六章 教育の場として社會集團、第七章社會と教育計画等については國家の機能と教育の項で近代民主社會と教育のあるべき姿を示し、川口プランをあげて社會と教育計画の實例について懇切に述べてゐる。

第八章社會理想と教育の任務

第一節民主的社會の理想に於いて、近代民主主義と日本の現實を論じて余す所なく、日本の教育の向うべき方向を卒直に述べ、「汝及び他人の人格を目的として取扱へ、決して手段として取扱うな（二四五頁）」と實踐理性の根本法則を近代理想の眞髓として示してゐる。教育の理想の項二四八頁は教育實踐者の教師として反省すべき頂門の一針である。文化の傳統と民主的文化的創造は日本文化の將來に對する聖なる予言である。第二節社會の診斷は社會改造の方向を穩健な道に求め、政治的、精神的の診斷に於いてその疾病を摘抉して教育こそ改善の基であると、教育に期待し、第三節社會教育の計画化で、計画法、職業指導、社會的訓練と教育を詳かにし、社會教育のカリキュラム及びその方法を結びとして、民主社會の教育の全貌を明かにしてゐる。

この書は一見平易に見えるが、含蓄のある一語一句に胸に手をあてて、再三三味読すべき本である。

西岡一義、下地惠常共著 杉山書店 三〇〇四

中學校のガイダンス

最近の教育実践並に教育理論の上に大きく浮び上つて來た問題はガイダンスとメンタルハイジーンであると思う。何れもアメリカ教育から示唆され刺戟されたものではあるが必ずしも全く新しく輸入されたものではない、このような孝え方はわが国にもぜんぜんなかつたわけではないからである、著者も「過去二十二年に近い小学校、中等学校、師範学校の教壇生活においての体験」と「新しい教育を目指して歩んだ二年有余の実践記録たらしめよう」として書かれたのが本書であるといつてゐる、その内容は、一、新しい教育の課題とガイダンス、二、ガイダンスの意義、三、新制中学校とガイダンス、四、ガイダンス組織と運営、五、ガイダンスの実践、六、ガイダンスのための調査、の六章からなつてゐる。

一、新しい教育の課題とガイダンス。

教育は未來に対する單なる準備ではなくそれ自身目的をもつた生活でなければならぬ、従つて將來の準備のため、大人への用意として與えられた教育は批判され「生活即教育」でなければならぬことになる、児童生徒のもつ興味が尊重され、可能性が開発伸長され、それが社会人として望ましい発達をなすところに教育がある。この個人のもつ興味や可能性が極めて多様であり、発達に遅速があり且その生長発達の間である自然的な社会的な環境が個人によつて異なるところに教育に於けるガイダンスの重要性があるといわねばならない、したがつて学校には教科の指導と共に個人の全領域の指導のためのカリキュラムが用意されなければならない。

人格の形成的機能は單なる知識の働きのみでなく、飢、渴、休養、運動、保温、睡眠、性などの身体的な働き、人間の性格や行動の基

中学校に於ては一般に教科担任制（たゞしくは教科の一部あての担任制であると思ふ）で小学校の学級担任制（たゞしくは全教科担任制である）を比較するときはガイダンスの担当組織において非常に弱体である。これを運営の面で如何に解決するか大きな問題である。解決策として次のようなことが考えられる。

1. 学級担任の担当時間を極力軽減する、
2. 担任学級の受持時間を多くする、
3. 指導の時間を特設する、
4. 晝食時清掃等を共にする、
4. 放課後等に二、三人と懇談する、
5. 学級に副担任をおく、
6. あらゆる機会に個人の観察、指導に留意する、
7. 父母、地域社会の機能の協力を得る、
8. 自治的訓練を助長して自主的運営を企図するよう指導する。

三、新制中学校とガイダンス

アメリカに於ては中等教育はハーバード大学エリオット総長等の十人委員会が「初等教育の時期を八ヶ年の代りに六ヶ年とし、中等教育の時期を現在より二ヶ年早期に開始すべきである」と提案され一九〇三年以後ジュニアハイスクール運動と研究が着々続けられ、「六ヶ年の中等教育のため十二才十八才の教育の必要を二期ジュニア（新制中学）とセイニア（新制高校）に分ちジュニアの時期に於ては生徒自身の適応性、特殊の才能、素質を探索することを援助する企図におかれ、彼等が専心従事しようと思ふ種類の仕事に対する暫定的な選択がなされなければならない。セイニアの時期においては選択された職業の分野で訓練を施すことに重点がおかるべきである」といわれている、中等教育三、三制への改編理由として次の諸点が考えられている。

本をなす同情、親切、的順、明朗、冷靜、の如き情緒的な働き、協同、社交、調和の如き社会的な働き等がありこれ等の調和充足された姿が人格であると考へる、従つて指導もよく適応し得る子供、自己の能力を立派に使用し、自分の可能性を利用して環境に融合してゐる子供という教育の目的を本質的には同じである。

質問紙によつて父母に対し、父母よりみたわが子の長所短所の調査報告を纏めた表は（五二頁五六頁）一般的傾向を知りグループガイダンス等の資料として参考とならうが、あくまで個人のガイダンスが本來の立場であることを考へる時如何に個々の調査の活用をはかるかにより注意が向けられる必要があると思ふ。

二、ガイダンスの意義

ガイダンスの必要はあらためて述べるまでもないところであるがその史的発達を辿ることを忘れてはならないと思ふ、アメリカに於て一九〇八年パースンズによつて職業局が開設された時から始つたといわれる。それが今日に於ては單に職業指導だけでなくよく社会生活に適応出来る円満な人間性の発達が目指されるようになったのである。その史的過程を辿ることが重要であり更にガイダンスの発展への機軸となるものと考へる、ガイダンスの意義については、助言（知識、習慣、技術、態度、理想、興味の示唆）によつて個人がその生活に於ける危機に直面して賢明な選択、適応解釈が出来るように援助してやることである、しかもそれは自己指導の能力がたえず生長してゆくことが保証されるような方法で行われなければならないというジョンズの言は明解でよく言いつくされてゐると思ふ。

1. 心理学的根拠——生理的的心理的变化の時期であり。その特殊の必要に適した教育が施さるべきである。

2. 身体的根拠——骨格の発達、筋肉組織、呼吸組織、消化組織、循環組織、とくに生殖組織の変化を來す時期である。

3. 社会的根拠——此の時期を一期として大人への世界へ發展する時期である。

4. 青年後期への準備的根拠として。

我が国に於ても新制中学校はアメリカの学制から習つたものであるが、日本の社会政策の立場、財政的立場、心理学的、生理学的立場等から妥当であるか否かは今後に残された研究課題である、われわれとしては特に生徒の身体的、精神的特質を研究理解することが必要である。

四、ガイダンスの組織としてその運営

旧い学校に於ける指導機関は訓練や思想指導の名のもとに統制や指示に終始した、新制中学は傳統も遺産も残滓もない全く新しい学校であり、開拓をまつ学校であり教育計画やガイダンスの肥沃な処女地でもある、しかもガイダンスはカリキュラムの編成の方向に調和と融合統一を計り機能の充分なる発揚が図られなければならない。従つてガイダンスの組織では次の諸点が考慮されなければならない。

1. 複雑多岐な図式的な構造をせらないこと、
2. ガイダンス計画は学校計画の統一的一部でなければならない、
3. 組織は実験的科学主義的でありたい、
4. 職員の仕事と奉仕を強調すること、
5. ガイダンス担当教師を選ぶこと、
6. ガイダンス委員会を考慮すること、
7. 専門家を置くことが宜しい、
8. 形式化を図ることより實際的運営が

必要である等が望まれている。

(1) ホーム・ルーム

ホーム・ルームはアカデミックな学校における教師中心の知識傳達の教育の反省から生れたものである。進歩主義の学校に於ける児童中心アクティビティーの教育が叫ばれる時代になると必然的な要求となつて全国的に普及し研究されて漸次地方に順応した経営が行われるようになった。その教育的効果は生徒自治的活動の最小の管理上の単位としての、ホーム・ルームの生長と位置に高い評價をするようになったのである。ホーム・ルームに於ける機能は教科担任によつて轉々と移動する生徒への親身の相談者であり、全生活指導であり、自治的活動の基底組織であり活動源泉である。又学校管理上の仕事は非常に複雑で教師のみによつては迅速な解決は不可能である。生徒訓育の問題もホーム・ルーム自身の問題として討議しそれを改善し相互に協力し合う習慣や態度を養う場でもある。

(2) 協力課程(特別教育活動)としての自治的活動の組織運営は民主的な生活経験を與える重要な活動である。この活動の教育的意義はこゝに詳細をさけて本書に譲りたい。

五、ガイダンスの実践

新しい学校は環境の変化拡大と学校の性格に不案内のために生活に不安を感じ生活地位は多くの動搖をかし出すものである。こうした変化した地位に一日も早く適応させ正しい学校生活させるためにオリエンテーションが必要となつて来る。オリエンテーションは入学当初から一定計画のもとに実情に即した実施が行われねばならない。在学中に於ては学習指導が肝要で学習指導のためには先ず個

性の発見、個人差に基く教育的措置の工夫が肝要である。優秀な能力をもつものには十分それを發揮させ、劣る能力のものには特別な補助的指導を與えねばならない。標準といつて画一指導であつてはならない。従つて進級制度の改善等質的学習分團の編成能力を基いとする学科の増減、教師の個別的取扱ひ、更に教科課程の選択、選択課目の選択、課外活動の選択、家庭学習、共同学習等において適切な個人指導が担任教師と教科担任教師、父母の間の緊密な連絡によつて個別指導が計画されなければならない。そのためには個人調査や実態調査の必要も生じてくる。調査事項の例(一六四頁)並に結果処理については示唆されることが多い。其の他詳細は本書にゆられたい。

六、ガイダンスのための調査

ガイダンスのためには基礎的には諸種の調査が必要であり詳細な計画調査の方法や資料の例は参考となることが多い。われ／＼としては必要に応じ利用を考へて実施することが大切で、廣範な計画と画一的な実施は勞多くして効必ずしもそれに伴ふことを考へなければならぬまい。本書は三四一頁からなり資料や実例が多く参考になることが多く一読をおすすめる。(阿相)

著者 二階堂爲好、定價二五〇円 發行所 明治図書出版
版社 以上

新教育の創造

—デモクラシーの反省—

はし が き

新教育として、教育制度の上に、法規の上に、理論に、その実践に、わが国の教育は民主化に向つて第一歩を踏み出していると同時に、われわれは現在に於て多少の差はあれ、混乱の渦中に投ぜられている。教員組合、教育委員会、P.T.A、学校経営、学級経営、学習指導等何一つとして多くの未解決を孕んでいないものはない。時に誤解が伴うにしても思想の変遷期として、思考改変の一分野として將又教育制度の確立にわれわれは如何に対処すべきか。

本書は一九一八年プロジェクト・メソッドの教育学的、心理学的理論づけをなし、デュロイと共に二十世紀のアメリカにおける進歩主義教育運動を代表する教育学者で、日本にも二回(昭二、昭四)來朝したことのあるキルバトリックが、Y.M.C.A.国際委員会の要請により、この不安定な現在社会において両親、教師、團體指導者達がデモクラシーに有終の美あらしむるには如何なる教育がなされなければならないか」という問題について書いたのを西本氏が訳したものである。

原名は Group, Education a Democracy であるが日本訳に際して『題名の Group は省くほうがよいと著者が訳者に寄せられたので、その内容をとつて「新教育の創造」としその上に「デモクラシーへの反省」といふ副題をつけ加えた」とことわつてゐるが妥当で

あらう。本書は三一二頁B6版で、全体は三篇十八章から成つてゐる。

第一編「現代社会の要求」について、デモクラシーとは之を信じ、之を希望し、之を實行するところにある。デモクラシーは政治にのみ関するものであり、また多くの人々が集つて自己を治めてゆくことであると考へられてきたが、單にこれのみでなく人類として個人として、いづれも人間の價値を充分に認め、基本的な人権を實現しようとすることに眞の意味が存在し、而もデモクラシーのよつてたつ自由はすべての人々に同様にあてはまる自由であり、如何なる人の自由と雖も侵してはならない、更に自由に権利が附帶すると同時に權利には義務が附帶するものであり利己主義と個人的人権の尊重は全く正反對であると喝破している。而も自由主義における價値ある人生とは、思索し且つ同人によつて實行されるところにあるから人間としての天分を最大限に發展せしめることが人権尊重であり、個性に應じて教育の機会均等を與えるのがデモクラシーの眞隨に合するものである。特に現代は、経済的に、思想的に、政治的に常軌を逸しているであり人類の社会に今日多くの禍をもたらす眞の原因はこゝに存するから、人類が知性・科学的知識——思想の自由、言論の自由により機会均等を図り最善のものを見出し拡大し、その

禍を排除しなければならない。従つて学校や教育制度の運営はこれに據るべきであるという。

教師の地位についても、その役割は国家の社会的政治的原理によつて決定する。全体主義的国家においては上意下達国家の宣傳機關にすぎないことを指摘し、デモクラシー国家における教師は組合加入や政党支持、社会的活動は一般市民と同等の権利を有することは何等疑うべくもないが、その権利は絶対的ではなく教師という立場から、ある程度の制約をうけるものである（国法にふれず又それによつて罰せられてゐるわけでないが、人の道に反した不道徳な行爲をした教師は青少年に悪い影響を與えるという意味で教職から追放されるべきであると主張し）と論じ、デモクラシーの学校は、成人する前に立派な社会的理想と、民主的研究と、正しい行動の習慣と、実質的な社会的知性をきづきあげることであり、之を達成するため、社会的に有用な活動特に協同社会的活動を重んじ、生きた社会問題の研究特に論争中のものをとりあげるべきであるとして五項目を提示している。又成人教育について科学や發明発見、技術の進歩は近年生産の増大に大きな影響をもたらした、この生産の増大とそれから生ずる多くの問題は、当然これに伴うべき人類文化の他の一面（道徳、宗教、人生観等）をはるかに凌ぎ両者の均衡を失したため、そこに現代文化の不安が胚胎し、必然的に爆發が起り、文化を破壊し人類社会を根底から覆すに至る。又個人的にも無学は経済的に不利のみならず生産機構の一面からも不利である、依つて成人教育は常に行うべきであり両者の均衡を保持増進し文化の向上を図らねばならない。即ちデモクラシーこそ人間を尊重し人間に機会均等を與え

科や授業を強調しすぎ、人格や性格を輕んじてゐるようなことはないか等の問題をあげてゐる。性格は天性と教育、遺傳と環境により影響される、その性向は天性のものであるが環境によつて変化し發育中に形成されるものであるからその望ましい考え方や感じ方を助長し習慣とならしめなければならない。「子供も人間である以上往時の「訓練的」方法や「一定の教義を教える」とは現在許さるべきでない」と強調し、知性の問題についても「個人の知性」に限界はあつても人類の知性に限界はない。人類のきづき上げる社会的知性は無限に發達するものである、ガリレオ時代以前においては討論する場合權威ある人の判定に俟つか、定説を論據としたがガリレオがピザの斜塔からボールを落す劇的な実験によつて新しい論理の時代が始まつた、神学の時代より科学の時代へ、論理より実験へ、こゝに現代自然科学における發達とそれに伴う現代社会の急激な変化が生ずる二重の原因が存するに至つた。この新理念により人間生活に大きな変化を生じ、新旧理念の合調と批判の下に有意義に改善してゆかねばならないとする彼の主張は学校の社会進出となつて表明されてゐる。

三

此の篇には民主的社會に相応しい教育觀の基調をなす原則として七項目をあげ之を詳述してゐるが、われわれの思案は現在われわれの立つてゐる現実から始まり、現実の知識と現実の價值判斷に基き、知性ある批判によつてなされる、而も之は實際経験の中に得られ、又経験をを通じてのみ發達する、「何を考え」「何をなすべきか」を最後に教えるものはデモクラシーに批判された経験のみであるとし

それぞれの能力を最大限に發揮せしめるものであり、社会生活の根底を培うものであるとする新教育に通ずる社会觀を論述してゐる。

二

第二篇は「人生と学習」について、その科学的な心理觀及び社会觀から出發して、教科書中心、教室中心、教師中心の傳統的な学校教育に反対し、兒童の活動を中心とする教育への轉換を説き、人格の形成と社会的知性へ發展してゐる。即ち「生物はその環境によつて變化するのみでなく、その變化は失われることなく持続し且つ將來の活動に備えてその体内に確立されるに至る」とのイギリスの W.C. Clifford の言を引用し、日常生活そのものが反応と反復によつて学習となる、即ち関心の程度に応じて注意を喚起し、判斷し、關係あるものを連絡し、享け入れて実行に移す、その享け入れた限度に応じて性格をきづき人格を形成する。この過程は絶えず繰返され新旧融合、生成發展して性格が向上される所謂「生活する」ことにより「生活化される」というのである。

指導については、学習過程は内的反應外的反應の要求から自我が發動し、行動となり全体として行われるものであり、興味が加つて経験の一分野を形成し、経験が経験の中に發展しこれらの経験が合理的に統合蓄積されて成立するという原理を見出し、その方法をこゝに需め「生活する学習」であり学習により青少年は性格を形成するという観点から、教師として、子供達は何なる生活をしてゐるか、どんな生活を通して性格を形成してゐるか、子供の形成しつゝある人格や性格について眞に考慮を拂つてゐるか、教師として兒童の立場を考へて最善をつくしてゐるか、試験成績をよくするため学

むすび

社会の改革は此の批判された健全な経験の蓄積運営——之を根據としてのみ——によつてなされるべきであると指摘してゐる。

近代の実証科学思想が新しい發明発見を生み、その新しい発見がまた高度の科学思想を作り出すという循環によつて、現代はより現代的となりそれによつて世界觀の變革、産業の革命、デモクラシーの伸展を促し、社会は物質的の進歩と精神的の進歩の程度に差を生ずるところに社会を不安に導く大きな原因があり教育は社会の文化運轉 (Cultural) をなくする爲に行われなければならない。その科学的な心理觀、社会觀から傳統的な学校教育に反対し兒童中心教育への轉換を主張した。一九二九—一九三〇のアメリカの不況は國民生活を極度に混亂せしめた、此の社会的危機を克服する爲に教育の檢討が行われたがキルパトリックも学者的良心から眞剣に検討し近代の科学的進歩が産業に利用されることにより生産が増大し、人間の生活内容が豊富になつたが反面、失業問題や労働問題等の社会問題を惹起するに到り、それは学校教育のよく解決し得るところでなく、社会的知性と現実の生活の中で習得するための教育の新展開が必要であるとの見解を表明し進歩主義教育をコミュニティー、スクールの理念の上に發展させる基盤を作つた。又十九世紀から二十世紀にかけてのアメリカの繁栄は自由競争の経済論理及倫理の上に展開されてきたが、この放任的な個人主義及自由主義の持つ弱点が大概恐慌によつて大映しとなりデモクラシーの機会均等の実現は不可能の状態にまで到つたがキルパトリックはこれを克服して新しい社会を再建するには現在迄の個人主義自由主義の再解釈の上に

立つ新しいデモクラシーの哲学がたてられなければならないと指摘した。

現代社会は絶えず躍動し拡大して止るところを知らない、教育はこの未知の未来に対処する人間を育成するにある。科学的に思索しその法則を正しく認識し人間で環境を調整する——と、又教育は社会的過程で生活を離れて存在せず而も生活は人間の心理学生活だけでなく、過去の生活でもなくまた現状維持的な今日の生活への適応のみを意味するものではない、社会は現実の構造を常に自己批判しつつ変化してゆくものである。即ちその変革されてゆく社会生活

ホーム・ルーム研究

ホーム・ルーム研究と言つても、これはアメリカ中等学校におけるホーム・ルームの研究書である。そして本書全体を貫いている基本的立場は、著者の言をかりれば、ホーム・ルーム組織の問題をアメリカ中等教育の発達過程からとらえると言ふ考え方である。

もつとも多く引用されている原書は

- (1) E. K. Fretwell, Extra-Curricular Activities in Secondary Schools 1931
- (2) H. C. McKown, Home Room Guidance, 1934
- (3) H. R. Douglass, Organization and Administration of Secondary School 1945
- (4) H. R. Douglass, The High School Curriculum 1947

基ずいて生れたものであることを説明している。要約すればインパーソナルな組織に基づく学科中心の伝統的中等学校をパーソナルなものに改造すべき組織として成立したのと言ふであろう。従つてその目的と機能は大別すれば二つになる。一つは管理上の機能であり、他は生徒指導のための機能である。著者は、フレッチウエル、マツコーン、H. R. Douglassの所説を引用して、この二つの目的、機能を重点として、特に中心となるべき生徒指導に関して種々の教育機能を素描している。マツコーンのあげたホーム・ルームの目的

- (1) 望ましい師弟関係の発展
- (2) 生徒の指導
- (3) 望ましい市民的理想並に習慣の発達
- (4) 管理上の仕事を教育的に迅速に処理する。

と言つたような機能を果すものとして、ホーム・ルームがいわゆる傳統的形式的な「学科の教室」に対するものとしての性格をもつて、即ち教室の方法の形式的であるのに対して型にはまらないという根本性格をもつものとして、この活動はそれ自体すでに課外活動に属するものであるが、一方課外活動全般を振興させる母胎でもあると結論づけている。

第三章 ホーム・ルームの組織と管理 第四章 ホーム・ルームのプログラム 第五章 ホーム・ルームも活動評價の部分は主としてホーム・ルーム組織の実際問題をその内容や方法の各面にわたつて、かなり詳細に解説している。

ホーム・ルームの組織と管理では、この本にも書いてあるようなその編成や組織や予定表の問題よりも、特にホーム・ルームの担任

こそ人間形成の基盤であり而も之はデモクラシーの実現によつてのみ完成されるとする彼の新しい文明史観に社会は徐々に廻向しつつあるようである。

民主主義の発展を希い、直接教育に携わるわれわれとしてもデモクラシーを再認識し教育を創造するため是非一読する必要があるものと思ふ。

(伊藤)

W・Hキルバトリック著 西本三十二訳
牧 書 房 二〇〇四

等であるが、種々の原書にあたつて、出所を明かにし、学問的に良心的に、アメリカ中等学校におけるホーム・ルーム組織ならびにその活動について、忠実に叙述したものと云われると思ふ。

第一章アメリカ中等学校におけるホーム・ルーム組織の成立事情及び第二章ホーム・ルームの目的と機能の部分は如何にしてホーム・ルームというものがアメリカ中等学校の歴史的発展の過程の中に生れたものであるか、如何に内的必然性に基づいて誕生したものであるか、それ故に如何なる機能と目的を持たねばならなかつたかを説いている。即ちホーム・ルームは中等学校における学科担任組織の弊害を救うためであり、学校の規模の増大に伴う処置として考えられたものであり、また二十世紀の心理学が発見した個人差に関する研究に

教師及びその指導組織について紹介しよう。著者はマツコーンの説に基ずいてホーム・ルームの担任教師の、最も望ましい呼称としてホーム・ルーム・ディレクター(ホーム・ルーム顧問)をあげている。というのはホーム・ルーム担任者のしなくてはならない最も難しい仕事の一つは、クラス・ルームとホーム・ルームという二つの相異つた状況にうまく適合することであるので、ホーム・ルーム担任者に「教師」の名を與えるならば、クラス・ルームとすべての点で異つたものであるべきホーム・ルームを結局別な名前のクラス・ルームにしてしまひやすいといふのである。この事だけでホーム・ルーム担任者のいかなる立場にあるかという事が想像されるが、多くの学校では個々のこのホーム・ルーム顧問の活動に一貫した内容と方向とを持たせるために何等かの組織が存在している。それには大きくみて、二つの類型があると説く。一つはホーム・ルーム主事(Home room Director)と呼ばれる一人の職員がいて、その学校のホーム・ルームプログラムの材料その他の全般的な計画、指導に当る方法で、多くの学校で行われている。もう一つの方法は右のホーム・ルーム主事の代りにあるいはそれと併行してホーム教師即ち顧問の委員会を置く方法である。委員会は次のような仕事をしなくてはならないとされている。

- 一、生徒、教師、両親の側における望ましい態度の発達を促す。
- 二、プログラムのための材料と活動とを示唆する。
- 三、提示の方法を指示する。
- 四、あらゆる種類の材料を集め、分類し、保存し、使用する。
- 五、ホーム・ルームプログラム及び活動を調整する。

六、活動、材料、方法などを評價する。

このホーム・ルーム主事又は顧問委員会の動きはホーム・ルーム活動の成否を決定すると言つても良いだろう。というのはアメリカのホーム・ルーム不振の大きな理由は、ホーム・ルーム顧問の側における訓練と才能と興味の欠如にあるばかりでなく、ガイダンスの原則と技術の実行計画を描くことができ、顧問達をして、その計画に興味をもたせ得る特定の責任ある人による監督指導の欠如に、更にはまたホーム・ルーム顧問に必要なデータを供給しないでいる事に存しているといわれているからである。

またホーム・ルーム活動を軌道にのせるためには、ホーム・ルームのプログラムをいかに作りあげるかということが大きな問題となる。即ちホーム・ルームのカリキュラムをいかに作るかという事である。先づホーム・ルームの目標が設定されると材料が択ばれ、全学年に配分され、ホーム・ルームのカリキュラーに盛られねばならない。そして最後に魅力的な面白い方法でホーム・ルームに提示されねばならない。

このプログラムの材料の選択と排列と提示とがホーム・ルームのカリキュラム・メーキングの重要な三段階である。この各々の段階について、アメリカの例を引いて著者は比較的具体的にのべている。実際ホーム・ルームの運営にはこの章は直接我々の参考にはなるが——特に計画的な点に欠けている我々には——これは飽くまでもアメリカの例であつて、直ちに我々のプログラムにならないというところを銘記すべきである。尚ホーム・ルームの評価に関しては、マツコーンの例をもつてきて説明している。色々の面についての生徒に

に対する詳細な質問紙法を利用しているのであるが、我々にとつて有力な参考資料となろう。然しホーム・ルーム活動の評価を客観的にする事は少々困難で、主観的になり易いものであるから、今後の研究課題として、さまざまの角度から一層価値があり、正確になるようにすべきである。

最後の章、諸家の批判と最近の動向はホーム・ルーム解消の傾向をめぐつて、ホーム・ルームの現在の位置と将来の見通しとをのべている。一休ホーム・ルームは分科された学科担任のクラス・ルームに対立するものとして、生れたのである。即ちクラス・ルームとホーム・ルームと中等学校教育方式が二元化されているのであるが、勿論これは決して望ましい姿ではない。新しい中等学校教育体制はこの一元化を目指しているといつて良い。要するにホーム・ルーム組織はこの中等学校の二元化の廣汎な動搖の中から生れた過渡的な現象であり、中等学校教育方式をいくための弊害を伴つた極端な学科担任別から新しいカリキュラムへ進展させるいわば媒介的な役割を果すべきものである。だからといつても今直ちに新しいカリキュラムにのり移られるものではないから大きな心構えは心構えとして、我々は発達過程における過渡的な形態としてのホーム・ルーム活動を活潑に有意義に送るよう工夫努力すべきであらう。こういう点、先輩のアメリカの様子を知つて、我国に適應させる事が何より大事な事ではあるまいか。この点に於いて本書は我々に色々の示唆や、暗示を與えてくれるものと思ふ。(佐々木)

駒沢大学助教授 宮坂 哲文
野間教育研究所刊 定價一五〇円

國語學習の入門

○入学前の導き

新しい國語教育に於て強調されてきた事は「話し言葉」の教育の面である。言葉をたやすく上手に使用する能力を持つ事は人間生活に於て最も重要な事である、日本の封建社会が如何に言葉によつて大きな支配を受けていたかは明かな事実であり民主社会の形成に當つて如何に「話し言葉」の教育が深い価値をもつかは國語教育界に於ける新しい課題である。

今迄の國語教育は入学によつて始めて開始されるように考えられていたが「ことば」の教育は入学以前から行われる事が必要であり入門期に於てこれについて正しい調査が行われる事は入門期の國語教育を効果的ならしめる上に於て極めて重要な意味をもつものである。入学前の「ことば」の導き方について次のような事が考えられる。

- (一) ものをみる。目前にあるもの又は思い出した物について、はっきりその名を教えてやる事。
- (二) 道順をおぼえる。ある所からある所迄の道順について道の順とか途中の事について話させる事。
- (三) ものを比較させる。物の大小、形、物の固さ、重さ、色彩等について話させる。
- (四) 名前と中味のこと。普通名詞や固有名詞の特殊性に対するおも

しろ味を感じさせる。

- (四) 絵を見る。入門期の「ことば」の指導に於て子供らが多くの経験とそれを「ことば」で表はし得る事が大切である。絵を見る事はこの意味に於て大切である。

- (五) 意味のあるもの、ないもの。子供の生活領域の中で同じ音、色、動作、形などの間に於てもいろいろ異つた意味を覚らせる事は絵や絵本などにおいてもその受け方や理解の仕方が違つてくる。

- (六) よく見せてやる。よく事物を見せて然かもそれに対して言語表現をしたい欲求を認めた時に適當なことを教えてやる。

- (七) 安心感を持たせる。これは國語教育そのものではないがすべての学校教育の基底である、又國語教育の立場から言つても学習準備のできていない子供に無理な國語教育を強いて彼らをして学校を嫌悪するよりな事のないよう注意すべきである。

○國語學習の準備

古い型の教育は子供の実体を知らずに画一的に一斉教授を行つて來た、それは國語教育に於ても同じ事である、入門期の子供はその子供の知能又は入学前の環境に於て受けた差違が著しく現われている、従つて学習用意が著しく低調なものがある筈である。即ちみんなと一しよにやる事をおもしろがらない。

話し方がおそくて、はつきりといえない子ども、はずかしがつたり、おちつかない。一人でいたいと思つたり、話を聞く注意が足りない、おちつかない。絵や絵本に興味がない。この様な子供はこれに当るものである、是らの子供に対しては子供のした事を話すようにする「ことば」というものに気づかせる、考えるようにする。読みたいという氣持をおこさせる、読みたい氣持をひきおこすように教室を整える。

○ 入門準備書の學習と指導

入学当初の子供には先づ入門準備書（プレブリーマー）が與えられる。この時期こそ読み方の入門指導として教師の大きい研究を要する時である、この期に於ては子供の力、發達の程度をよく知つて急がず焦らず學習題材を選ぶ事であり、文字のよみ方や書き方に対する指導態度について從來のような方法では決して効果は上らない。「まことさん、はなこさん」は文部省著作の入門準備書である。本書の目あてとする所は次のような点に留意してある。即ち文学を指導するといふよりも如何にして彼らが話す意欲を起させるか、いかにそれには文字の提出について深い注意と絵を中心として話す手かきりをして示している。そして自然に文字に親しみと文字習得の意欲を起させる様意図してある。又本の扱い方や眼球運動について馴れさせ、漸次文字一つ一つを覚えさせ文字がいくらか書けるように到らせる構想で編まれている。従つて話す意欲や文字把握への導入についてはいろいろ新しい試みが考究されている。「まことさん、はなこさん」の取扱ひの實際については先に文部省より刊行さ

れた指導書に詳説されているからこれを研究せられたい。

○ ことば練習のいろいろ

新しい国語教育の大きな轉換は「話しことば」の教育にある事は既に述べた所であるがその具体的方法として考えられるものに多くの問題がある、

入門期に於けることばの練習の基本は豊かな生活経験を與えんと共にこれを發表する手がかりとなる教科書、玩具などを備える必要がある。学校で作られたワークブック等は大切な役割をもつものである。次に耳を馴らす練習、人の動作を見る練習、文字板による練習、黒板による練習。文字カードによる練習、絵字びきによる練習等が考えられるが「文字板」による練習は、從來、この言葉はないにしても實際行われていた方法ではあるが新しく見直し研究する必要のある價值のある方法として研究されて來た。文字板は経験チャートとも呼ばれる。文字板は子供らの経験を文字に書きつけ、それを言わせる事によつて自然に文字を認知させる方法である。ひらがなはローマ字等と違つて鮮明な視覚心像が弱い。更に一字一音である爲に語形全体として受けとり難い。然し文を讀む事は思想を全体としてつかみ取る事であり一字一音を探る事ではない。書かれた文字は一つのことば、としてよめるように練習していく、一字一字を辿らなくとも、自分の發達した話とその書かれた文字との關係を教師と子供らの話し合いによつて書かれた文字に対する親しみと、それとことばとして認知し、更に自然にそれを文字化して行く事が出来るのである。わが国の文字が非常に複雑を極めているので文字習得

に対する子供の負担は非常に大きい。それには第一に文字習得を興味深く持續させること、第二に無理な考え方をしないこと。第三に文字の必要性を分らせていく事である。文字板による指導はこの三つを初歩的に統合して行わねばならぬ。教育の意義がある。文字板は前述の様な初歩的指導から様々な文章の分解綜合による工夫をする事によつて更に有効な價值が見出される、又話し方の基礎を作り作

文学習にながかりことばとしての文字記憶に有効である。文字板の活用については未だ余り廣く研究されていないが子供の国語力の状況によつてその具体的運用について種々の方法が考案されるのである。

（石森延男著）

金子書房 二五〇円

（菊地）

教育的環境學について

「教育は愛であると同時に智でなければならぬ。智によつて導かれざる愛は盲目の愛である。一人の兒童を教育しようとするときには、先づ兒童を知らなければならぬ。——兒童を知る事は一人の兒童を知ることではなければならぬ。一人々々の兒童を問題にするとき、私達にはその個性が問題として提出される。個性を問題とするとき、殊に教育の領域に於ては、兒童の環境が極めて大きな問題とならざるを得ない。兒童を形づけ、これを動かして行くものは即ち環境に外ならないからである。……環境の問題は……科学的方法によつて研究せられ、科学的基礎の上に立つ技術へと進展しなければならぬ。」とは本書を貫く著者の意図である。

教育は愛であると同時に智——科学的方法——である。教育における環境の重要性は唱えられても、諸々の問題を批判的に研究し、実証的に研究することは、わが国の教育學において最も缺けてゐるところである。このことを先驅的にとりあげたのが山下氏のこの書であ

る。この書が始めて世に出たのが昭和十二年であり、戦争によつて「教育的環境學」が空白にせられたことは遺憾であるが、眞の教育が科学的実証的な研究の上に打たてられねばならぬ今日、われわれは必らずこの書の精神にもどらねばならない。この書は歴史的な意味をもつと同時に現実に重要な意味をもつものである。こゝに再刊の意義がある。

本書の構成

本書は序論、前編、後編の三部から成る。序論は環境研究發生の論理的必然性と歴史的必然性から、教育的環境學發生の事情を説く。前編は、総論であり、教育的環境學の一般問題の考察にあてられている。後編は前編の一般的な問題考察の基礎の上に、具体的な研究を実証的な研究調査の文獻について総合的にまとめたもの、また著者自らの實際の資料についての研究を集成整理したものである。この書は環境學であり、教育において機能する環境について教

育上の問題の所在を指示するのみならず、同時に教育心理学的に兒童の實際の取扱ひを示唆するところが多い。教育的環境学は一面環境の心理学である。さらにこの書は教育社会学であるといえるであろう。著者自らいふ如く、この書は独人ブーゼマンに負うところ大であるように思われるが、アメリカ教育学の紹介の急なる今日いさゝかもマイナスとなるものではない。

教育的環境学はいかにして発生したか、

教育は常に具象的現実的存在として個性を対象とする。その個性がいかにして形成せられるかの條件の探究が必然的に要請せられることは教育にとつては必至のことではなければならない。その條件とは素質と環境である。ここに環境研究發生の論理的必然性がある。

近代社会の経済機構は人口の都市集注、労働者階級の発生をもたらしした。都会兒童、貧困兒童の教育が眞に適合した生産教育となるためには、兒童の心身の特徴、さらに進んで彼等の生活環境、及びこの兩者の因果關係に対する認識を要請した。それみならず教育が一部の階級の占有物から一般大衆の上に拡げられることによつて環境の研究は教育の實際にとつて欠くべからざる指針となつた。これが教育的環境学發生の社会科学的因由である。また第二の因由として異常兒童から發生せる因由があげられている。社会構成の多様性によつておびただしい不良少年の発生は、これもまた歴史的の事件であり、教育的環境学發生の歴史的必然性となることができ

る。

環境及び環境学とは何か。

本書の前編は、第一章、教育的環境学の課題 第二章、環境概念

の規定、第三章、遺傳と環境、第四章、環境類型論、第五章、環境研究法、第六章、環境關係の基本的様式、第七章、環境技術学の七章から成り、教育的環境学の一般的考察、理論的考察がなされている。こゝでは環境とは何か、また教育的環境学とは何か、その方法には何があるかをたどることにする。

本書は環境概念を規定するのに、ブーゼマン、ポップ、グラウコプの三者の概念規定を展開している。ブーゼマンによれば、環境は單なる外界ではない、それは個人によつて体験せられあるいは彼に影響を及ぼす所のものでなければならない。ブーゼマンは環境と人格との關係を、環境が人間に及ぼす影響と人格が環境に対する体験との二つの様式に區別している。この規定は環境の限界規定である。これに対してポップ及びグラウコプは、環境を内容的に規定する。グラウコプによれば環境とは「主観に熟知及び依属の性質を以て知覚され、あるいは体験される所の凡ての外界の諸因子を包含する。なおこのほかに、体験されないが、体験され得べきもの、あるいは純因果的に影響を及ぼすべき諸因子はすべて環境にぞくする。」のである。この兩者の見解及び短所を綜合して、著者は簡明に環境とは「個人に何等かの影響を及ぼすべき外界の一部分である。」と規定している。而してこれを以て必要にして且つ充分であるという。

以上が環境一般の規定である、教育的環境もこれにもれるものではない。このような環境論に基き教育的環境学とは何か、その使命が問題になつてくるが、教育的環境学の課題は、發達の見地に立つところの、個性の環境に対する依在性の闡明だとしてゐる。すなわち一面に兒童の環境を分析記述すると共に、他面においてこのよ

うな環境に制約せられてゐる兒童の特異性の研究解明に存するとする。従つて教育的環境学は、第一に事實的環境を記述し類型を設定しこれをさらに諸種の因子に分析し、第二に右の如くして認識された環境を個人との聯繫性において研究し、第三に環境によつて制約せられる人間の構造を研究し、第四に環境の影響の限界を設定し、さらに素質と環境との影響力の限界を明確に把握せねばならない。

そして最後に教育的環境学は、以上四つの課題に應じて解明された事實的環境の規定的諸因子を、一定の教育の目的に應じて設定された教育理想に対して、その実現方法に役立ちうるもの、すなわち実践科学としての環境技術学でなければならぬ。

さらに環境類型論においては環境分析の一般のおよび具体的、技術的方法を紹介しているが大方の参考となりうると信ずる。ついで環境類型とこの中に在る個性との關係を研究すべき研究法、(一)実験的方法、(二)統計的方法、(三)事例研究法、(四)情勢研究法に言及している。

經驗的環境類型の諸問題

後篇は前篇によつて規定せられた教育的環境学の一般的、理論的な原理の具体的な展開図である。その第一部は「社会的経済的地位

と兒童の精神發達」との連関を実証的な文獻によつて整理したものであり、社会的経済的地位と言語發達の連関、住居と知能の發達との關係、親の失業とその兒童への影響とを考察している。親の職業、教育程度、学校の種別、住居の狀態(疊数の多少)、失業の狀態等が兒童の精神發達に予想以上に影響していることが知られる。

第二部は「家庭的環境と精神發達」として、家庭的環境と幼兒期の知的發達、数意識、文字の知識、家庭環境と言語發達、さらに一人子に関する詳細な諸問題、同胞數(兄弟姉妹)と知能の發達とに分けて内外の文獻と著者自らの研究によつて實証的に検討している。最後に第三部として「文化的環境と精神發達」として、都會兒童と田舎兒童の言語發達の差異についてのべている。

教育がどこまでも個性の伸長を念願するものである限り、科学的な技術と方法とによる指導を期待しなくてはならぬ。教育的環境学という語は今日あまり耳なれてはいないが、それが環境と個人との相関を究明する学である故にこゝした考察法は現場の教師の必らず得せねばならぬものである。すべての論述が數的な實証に基きつてゐるのが本書の特色である。

(山下俊郎氏著 岩波書店發行 二〇〇四)

(船山)

學校學級經營の基本問題

この書は著者が前後二回の教育長指導主事講習会に講師として出

られた時、多くの地方の實際家を相手として研究された事柄や又文

部省内外の方々。CIEの教育の顧問方々より助言指導を受けたことを一応まとめたのがこの本なのである。従つて學術的体裁を持つていつた風のものでなく著者自身の素直な経験の発表であるといふべく、特に著者が興味を持つていてと思われる学校や学校の基本的な断片的問題について面白く述べている。

内容は十五章 (一)、学級経営観の近代的発展 (二)、教育委員会制度と学校経営 (三)、校長の職能 (四)、カリキュラムの問題 (五)、学校経営と学級 (六)、学級経営上の諸問題 (七)、職員組織と担任制 (八)、校長室と教員室 (九)、新しい学級簿の性格とその活用 (十)、進級の問題 (十一)、訓育の問題 (十二)、PTAの運営 (十三)、職員の特種勤務 (十四)、教員の教育活動 (十五)、小学校経営の手引 (二百十頁から成つてゐる)。

このうち我々としては是非知らねばならない最少必要事項をピックアップして紹介したい。

一、学校経営という言葉の持つ意味は三つの発展的性格を備えている。その一は形式的経営から実質的経営への発展であり、その二は専制的経営から民主的経営への進歩でありその三は学校孤立主義から社会開關的経営への発展である。従来学校経営といふばとかく形式的にこだわつて過ぎていたよりである。即ち法規の表面的実施を以て事足れりとするような消極的やり方であつたようである。而し学校は生徒児童の発達を以て目的とするものであるから法規もその目的を達するためのものであり学校経営の判定の基準も亦そこにおかるべきである。

終戦後教育の民主化が強まれば学校についても民主的に運営

相談を持ちかけるべきである。指導主事と雖も人間であり研究や経験に限度があるから百科辞書的に問題に即答することはできない。

三、第三章第四項に「女子校長の問題」とありその要点を抜萃すれば校長としての適否はその人の能力によつてのみ判断すべきであつて性別によつて職能の区別を考へるべきでない。従来校長道とも云ふべきものは全く男子の校長によつて築きあげられたので、校長として行動様式は悉く男子向の性格を持つていたことは事実である。

之からは男性に特有な校長道を改め校長一般として性的偏性をぬぐい去つた新しい校長道を建設しなければならぬ。今の女子校長の大部分は自分が校長にならう等とは夢だに考へたことのない人である之から女子にも教頭或は校務の枢機に参画する経験の機会を得させるならば如何に目ざましい活動をされるかが想像される。女子校長より大いに自重せよ。後輩校長の爲に光榮ある先驅者としての歴史を飾られんことを期待してやまないと激励して結んでゐる。女子校長のみでなく女子上席も亦同じく云えるのではないだろうか。

四、第四章にカリキュラムの問題がとりあげられてゐるのであるが特に著者の言わんとしてゐる所はコア、カリキュラムの問題にあるよりだ。眞摯なカリキュラムの研究に対しては深く敬意を表するが余りに一方的に偏し急いで無理をしてまでコア、カリキュラムにあせらないことが肝要である。もつと腰をおちつけ將來を見通し一步一步その改善進歩を図るという堅実な態度を期待してやまない。現在の段階に於ては廣域カリキュラムが一番よいではないか。それは現在各教科毎に教科書や学習指導要領が編纂されてゐるのは各教科を孤立して指導すべきことを要求してゐるのではない、それ所が

されるようになったことは喜ばしいことであるが果して正しく実現されてゐるかどうか校長が独裁的経営をすることは勿論悪いが教員が校長の職能を軽んじ或は無視するが如き学校の現出したことは民主的経営の眞義が理解されなかつたことに基因する遺憾なことである新教育下の学校では特に責任の分担帰属を明確にすべきであつて校長はあくまで一校の最高責任者であり全教員の指導監督をなし且つ教員の協力を得て児童生徒の幸福社会の期待に答へたいものである。又教員は各自の職分に全力を注ぐと共に校長並びに同僚相互に敬愛と協力を旨とし校長の行方教育方針学校の維持経営等に助力すべきである。

学校は従来「象牙の塔」としての学校におさまるかえり、社会から隔離された教育を行い傍ら社会教育や家庭教育は別のコースとして扱ふという傾向であつた。近代学校の社会的重要性が再確認され学校教育の内容そのものが社会の現実と直結すべきことが強調されかつ学校が子供の学校であると共におとなの学校社会全体のサービスマスターでなければならぬということが強く主張されるに至つた。即ち今後の学校経営は地域社会学校の性格を持つべきである。

二、第二章等三項「指導主事と学校」という題目の下に指導主事の性格についてのべてある。

指導主事が学校を訪問した場合は校長上席から学校全般の様子を聞くこと校舎教室の設備や子供の学習の現場を観察すること。教師と個別的又は集團的に色々の問題について話し合うこと等教師の人格を尊敬し唯一つ子供のよりよき成長発展の爲に誠意を傾けて助言と指導に當るべきである。教師も亦視になつて色々の問題について各教科を相互に開關させ、時には二教科位同時に扱われることもあろうし或は教科の限界をこえて統合された形で学習されてもよいのである特に社会科の学習が学習全体の中心的地位を占めるようになることが望ましく又自然なのである。カリキュラム改善は不断の永続的課題で不用意に軽率に新しいカリキュラム型を採用すべきでない。

五、学校学級経営上の諸問題のうちで特に必要と思われることがらについて記してみたい。学級編成には民主化、個別化、社会化の三つの基本原理がある。この三原則がおよそ学級が編成されるに當つて如何なる種類の学校に於ても如何なる地方の学校に於ても基本的に考慮されねばならぬものである。その編成の仕方については「生年月日地域別、能力別、特殊学級等」がある。今最近の問題になつてゐる能力別学級と能力別のグループ指導についてのみその結論を紹介する。能力別学級編成については米国教育関係者も極めて懐疑的であり、むしろ民主的心理的見解より否定的態度をとつてゐる而し学級の中で学習内容によつて能力別にグループを作り能力に応じて指導することはよい。唯班別は固定するものではなく随時子供の学習能力に応じて班の編入替を行わねばならない。

次に担任制の問題であるが、それには学年固定制、持ち上り制、教科担任制等がある。従来は持ち上り制が望ましいと考へられていたが職員の異動の頻繁な事情と教師にも個性あり、能力の限界あり、癖もあるという理由で必ずしも可能性なく理想的方法とも云えないそれでは学年固定制がよいかということになるが毎年担任が変るといふことは統合的な学習指導の上から内至は子供の精神衛生の上か

ら色々と支障があるそこで結論として小学校六年中二年か三年で交るさいった方が最もよいように思ふ。特別の教師は六ヶ年持上つてよいこともあり得るが之は例外である尙教科担任制は小学校に於ては原則的に用ゐべきでない。

教諭の数も小学校では学級の一、五倍としないという要求があるが之は財政の上から実現困難のようである。又一面学級児童数も四

児童観察の理論と方法

本書は先生の処女出版として昭和十四年に主として初等教育家、師範学校生徒、児童心理研究の学生のために企圖されたものである。当時、東京朝日新聞紙上で評論され「新しい光のもとにかゝれた新しい心理学書」として推称され、他の類書と比べて特徴あるとされた書物である。児童理解の必要は、今日の教育においては、單なる空虚なかけ声ではなく、実質的な意義をもっている。まさに今日の教育は児童を理解する技術と能力がなくては不可能になつてきた。こゝに本書の改版の意義もあつたろうし、本書の内容を紹介する所以も存するわけである。観察とは單に対象を「見る」とか「ながめる」ということではなく、理解におけるそれであつて、理解の伴はない観察は何等の意味をなさない。理解はその本来の意味においては法則の把握を意味するから、児童観察とは児童の行動の法則の把握でなければならない。そしてこの法則は單に児童の生活を調

十人以下に減少し資質のよい教諭を採用し学級あたり一人とするのが最もよいという意見もある。何れがよいか今後の研究すべき問題であろう。尙学籍簿の性格とその活用進級の問題とT.A.の運営小学校経営の手引についてその性格趣旨等について説明あるのであるが紙数の都合上割愛したい。

(元木)

(文部省視学官武田一郎著 牧書店発行 一八〇円)

査することによつてのみ得られるのではなく、冷徹な科学的観察眼をもつて子供の全行動を観察しなければならない。教室内における教授の場面、仕事の場面、運動場内における遊戯の場面、交友の場面等実に児童は豊富にその行動法則をあらわしている。これらの場面からその行動の法則を抽出するのは教育者の側における課題である。ゲシュタルト心理学によつて明かにされた環境の問題は、その点に關して教育的実践に素晴らしい展望を與えている。児童の行動法則をその環境との機能的關係において把握しようとするのはゲシュタルト心理学の根本的考え方であるが、実に本書はこの考え方によつて一貫されている。

第二章において環境の問題から出発した所以もこゝにあるようである。環境の問題の敘述にあつては、クルト・コフカ(K. Koffka)の「ゲシュタルト心理学原論」及びクルト・レヴィン(K. Lewin)の「トポロジカル心理学」に負うところが多いようである。第一節においては「行動と環境との關係」を論じて、児童の行動を規定する場面の全体を行動的環境或は心理的生活空間等とよび、児童観察の初めにおいて順序として先づ此の行動的環境の理解から行なわなければならないことを指摘している。そして第二節において、凡ての行動が常に必ず個人の内面情勢と場面構造の特性との両方に依存して生起するとして、レヴィン(Lewin)の公式 $B=f(P, E)$ をあげている。Bは行動を、Pは個人の内面的情勢を、Eは場面を示している。そうするとこの公式は行動は心理的生活空間或は行動環境に依存するのであるから、 $B=f(P, E)$ (心理生活空間) ということになる。而して行動環境を形成している物的事実、社会的事実、概念的事実の三者は、吾々にとつて或る影響を與えているところのものであり影響を與えているという限りにおいてそれは同性質のものでなければならぬから、それらは純粹に物理的事実、純粹に社会的事実、純粹に概念的事実ではなくて精神物理的事実であるとしなければならぬ。かくて初めてそれらが生命の科学としての心理学の中に取り入れられるのである。

第三章以下は個人の内面的事情に關する考察である。心的体制、自我体制、欲求及び意志の問題と、その一般法則としての飽和、補償行動、要求水準、成功と失敗、怒り、盜癖、喧嘩、嘘等が取扱われている。心的体制の一般的性質として次の五つがあげられている。即ち、(一)心的体制は時間空間的事象である。(二)心的体制は運動的生起である。(三)心的体制は方向を持つてゐる。(四)心的体制は全体分節的である。(五)心的体制は力性をもつてゐる。さてこの体制の中

の事物、事象は個人の行動を條件づける点において皆同等の重要性をもっているわけではなく、常に自己即ち中心領域との關係において、その意味及び役割を異にしている。この關係を瞬間的情勢と生活情勢との二つに分けられる。前者は瞬間的な特殊な心的情勢であり、後者は前者の背景ともいえる。比較的に恒常的で、長時間かゝらないと変化しない。ともあれ、両者は密接に關聯しており、何れの情勢において処理するかによつて人柄の相違が示される。

行動環境における「場面」の考察より、更に場面の中において行動する自我についての敘述が行われる。第四章における自我体制は自我の考察より、場の事物としての自我が取扱われている。自我の分極における結論は、「(一)自我は行動の場の中で比較的分節した重心領域をなしている。(二)行動の場の中の自我の境界線は可變的である。」ということである。そして欲求体系としての自我においては自我の恒常性と複合性とがとかれてゐる。自我は恒常性を示し、その中に種々なる領域があつて複合性をなしてゐて、そこに又圧力、緊張などの力がはたらいてゐる。即ち自我は一つの大きな緊張体系でありこのことは自我は欲求の体系であるということである。

我々に生命があるといふことは、そこに何等かの活動があり、生命の表現として欲求をもつてゐるということである。第五章は欲求の問題を取扱つてゐる。我々が行う一切の行動は皆何等の意味で緊張解消の方向に向いてはたらいゐる。かゝる緊張の解消を心的移動ともいい、若しかゝる心的移動が妨害される場合には、その妨害物を障壁とよんでいる。そして圧力或いは緊張の程度は要求水準とよばれ、圧力、緊張が満足された場合には心的飽和といわれ、これ

らの現象について述べられている。第六章においては意志体制、第七章においては成功と失敗、怒り、喧嘩、第八章においては児童の嘘言、羞み、盗癖が心理的な立場からだけでなく、教育的な立場から考察が加えられている。我々の住む場面は社会的心理的世界であるから、共同社会の力によつて意志の訓練を企図していること、或は要求水準に人爲的に加工することによつて、その児童の興味を刺激したり、性格の矯正に利用したりすること、或は盗癖の矯正には欲求を容易に満足させるような条件を与えることなどは、著者の實際教育に対する関心のほどがうかがわれるとともに注目すべき見解であるといわねばならない。

第九章の児童の特性においては、児童の感覚知覚の問題が主として取扱われる。児童観察においては児童の意志、欲求、性格の方面が重要な部門をなすのであるが、成人と比較して児童が如何に異つた知覚の方法をもっているかを明らかにすることは、児童観察上極めて有効である。「児童は小さい成人ではない」との認識は実に児童の行動の上においてのみでなく、思考、知覚、表象などの上においても顯著に見られる事実である。第九章における敘述はヴェルナー(H. Werner)の「発達心理学入門」に主として負っているといわれる。勿論本章にのべる如き知覚、思考の様式に児童は必ず従うものではないが、児童を児童の世界において観察するには極めて必要な知識である。

第十章においては精神薄弱、学業成績不良の問題が取扱われている。何れの学級にも学業成績不良の児童が数名は必ず居る。それらのものは大抵教師からも、親からも見捨てられ勝ちである。これ等

逃避場面観察法、水準加工観察法葛藤及び障碍場面観察法、トボロギーの応用などが説かれている。我々は本書によつて得たところに基づいて、長い時日の修練によつて観察眼を養うことが大切であると思う。

以上本書の内容の概要であるが、児童理解への好書として教育の實際家におすすめ致したい。

(佐藤)

不良化傾向の早期発見

本書の意義

「青年の心理」「女子の心理」「農村児童の心理」など多くの人々に親しまれている著書をもつ、牛島義友氏が、「これによつて社会に対する学術奉仕の一端を果そう」として昭和十六年から昭和十九年までの研究により作製されたのがこの「不良化傾向の早期発見」である。不良青少年の問題を資本主義の発達、これに伴う大都會の成立云々と説きおこす時間の余裕をもたない程、私達は今、青少年の不良化に頭を悩ましてゐる。それはすでに特殊な施設の経営にたづさわる人のみの考える対象ではなく私達全部の大きな関心事である。

これに対しては経済生活の安定、校外指導、児童保護等種々の対策処置が講ぜられようが、しかし問題を根源的に解決するのは不良を未然に防止する事ではなければならない。青少年不良化の問題が児童

の児童の指導法の確立していない原因は、学業成績不良は如何にして形成され、又それらの児童は如何なる精神構造であるかという理論が明かにされていないところに存している。本章はかかる実践目的にそつたための企圖であつて、精神薄弱児の力動的特徴、中断行動の再行現象、特質並に教育がかなり具体的に論ぜられ、学業成績不良児についても、原因と教育が考察されている。学業成績不良に対しては、温かい理解と同情とが最大の必要条件であるといふなどは方法上の眞理であると思われる。

人は結局は社会において生活する。人が発達することは或る意味からすれば社会性の獲得の方面から規定することもできる。性格の問題も亦実に社会において初めて問題となり得るのである。第十一章から第十三章までは社会性、性格を敘述している。先ず児童の社会的行動が論ぜられ、統率性(Leadership)、即事性が述べられている。児童の自己中心性は成長して即事性にかわる。そして教育はかかる即事的態度の人物をつくるにある。然しこれだけにとゞまるのではなく、人格への発展を目標として之を優秀形態にまで高めなければならぬと述べている。これは現実と理想とが人間形成において一体となつてゐる香高い姿である。

第十四章以下の「児童観察の諸方法」は本書の重点をなすものである。然し著者は全体からみれば僅かの頁数をさいているにすぎない。然しこのことは方法を輕視しているのではない。方法は決して知つてできるが如き安易なものではない。観察法は一つの技術である。すべての技術がそうである如く、技術はすべて練習によつて修得される。観察法として、位相観察法、條件分析法、臨界観察法、

定價三五〇円

東京高等師範学校教授 後藤岩男書 東京目黒書店發行
東京文理科大学講師

本書の構成

学の出発点であり歸結点であるという事については別の機会にゆづるとしても、「不良とは精神機能の一部の欠陥ではなく全人格全性格の問題であり、精神現象の中でも最も複雑な分野である」事は否定出来ない。この困難な問題解決の爲に、著者が敢えて研究作製した「環境性格評定尺度」「非行検査」「性格検査」は、とかくすると戦前のしつけと訓育に郷愁をおぼえがちな、私達にとつてはまことに貴重な科学的教育法である。私達はこの尺度、検査の積極的な活用をはかり当面せる不良化問題の暗雲を明快にはらいたいと思う。

不良化傾向を児童の環境、生育、生活、性格などから推定しようとする「環境性格評定尺度」。評定者の負担を軽くして簡單でしかも充分信頼出来るものとして考えられた「環境性格簡易評定尺度」。

兒童の生活の中に見られる非行を段階づけようとした「非行検査」。
不良兒童のために直接検査の有利な点をねらった「性格検査」につ
いて夫々篇をあらためてその作成過程、標準化、採点法、信頼性、
妥当性等科学的根拠について詳述し最後に尺度、検査用紙を附録と
してつけてある。その何れの篇でも、終りに「概括」の項目を設け
て要約し、簡明な説明を加えているが極めて親切なやり方で読者は
こゝで一応整理が出来るし、忙しい人はこゝだけ讀んでも概要をつ
かむことが出来る。

尺度、検査の内容

一、環境性格評定尺度「附録参照」

これは従来の不良化の原因に關した研究と、最近の社会的予後の
研究とを基礎として作つた原案を種々の角度から検討し改訂して出
來たもので、正常兒男五〇六、女一九七計七〇三、問題兒三四〇、
合計一〇四三名を被検者として、標準化してある。

一、簡易評定尺度「附録参照」

一四（第一部から）五七（第二部から）

八一〇（第三部から）のように、基本の評定尺度の中から問題兒
を識別する力の最も強い一〇個の項目を選んだものである。

一、非行検査「附録参照」

非行名の頭についている分類番号は重視する必要はない。非行名の
後に書いてある数字の（1）は軽いもの（第一段階）（2）は次（第二段階）
（3）は最も問題とすべき非行（第三段階）である。
即ちこゝにあげられた四十一の非行は現象的な重大さに着目するが
る。

る。

2. 教師或いは指導者が兒童について評定する。

3. 評定についての心構えは「附録」参照。

4. 簡易尺度は評定項目が大へん少いので、特殊な事例を見落す
ことがあり、従つて各個人の問題の所在が不明で、それに応じ
た指導方針をたてる事の出来ないうらみがある。それで簡易尺
度で大体の評定をし、その中の問題になるもの（2以下）につい
ては基本の尺度を課するように考えた方がよい。

一、非行検査「附録参照」

一、性格検査

1. 小学校五年乃至中学生に集團検査として施行する。

2. 検査一、二、三は、はじめに書いてある注意事項（附録参照）
を話し、一問づゝよみ、分り易く説明して線を引かせる。

3. 検査四は、はじめ×に鉛筆をあて矢印の方向に五つの田の中
に×印をつける事をはなし、約十秒間よく見せてから目をつぶ
つてはじめる。

三回やるが第二回は△印、第三回は○印で、成績は四形の中
央に記録しておく。

（こゝに「手引」を見られ度）

採点法

一、環境性格簡易評定尺度

1. 第一段階（左端）——一点、第二段階——二点、第三段階——三点
第四段階——四点、第五段階——五点、この点数を右端の線の上に

精神衛生的見地にたつて將來大きな禍根を残すようなものを重視す
るかによつて重さがちがつてくるわけであるが、五名の心理学者の
評定を綜合して段階つけたものである。被観察者は正常兒男五九
七、女二四八、計八四五、問題兒三六〇、合計一二〇五名である。

一、性格検査「附録参照」

（検査一） 徳性検査 十八問

この検査は被検者に道徳生活に關した事柄を直接に質問し、不良
性行の有無や程度を自己判定させるものである。

（検査二） 劣等感検査 二〇問

劣等感とは人間行動の基礎になつており、就中不良行爲や反社会的
行動の基底となつていふと考へられるが、その程度を測る事が出
來れば問題兒を検出できる。

（検査三） 情緒性検査 二五問

人が緊張的場面に於いて満足な精神調整ができるか否か、即ち未
知の環境に対する適応力を測定するものである。

（検査四） 信頼性検査

命令にそむいて偽つたりカンニングをするか否かを實際に觀察す
る作行検査である。從來行われた種々の性格検査を検討し我が国
に適當するように標準化したもので、被検者は正常兒男七四四、
女三六一、計一一〇五、問題兒四五一、合計一五五六である。

評定法と検査法

一、環境性格簡易評定尺度

1. 小学生上級、中学生のみならず保育所の幼兒にも適用でき
表わす。

2. その平均値（1）の合計点を評定出來ない項目を除いた項目数
で割る）を上の評定欄に書き入れる。

3. 評定点を段階基準に照らして、該段階に○印をつけておく
一、環境性格評定尺度

1. 各項目の第一——第五段階の配点は、簡易評定尺度と同じ。こ
れを項目の重みにおうじて倍数し、右端の線の上に表わす。

2. 項目数で除した平均点を評定点の欄に書き入れる。

3. 次の段階基準表にもつて段階点を出す。

段階点	第一部	第二部	第三部	綜 合
-5	1.0-1.8	1.0-1.8	0-1.0	1.2-1.9
-4	1.9-2.7	1.9-2.7	1.1-1.9	2.0-2.7
-3	2.8-3.5	2.8-3.5	2.0-2.7	2.8-3.4
-2	3.6-4.4	3.6-4.4	2.8-3.5	3.5-4.2
-1	4.5-5.3	4.5-5.3	3.7-4.5	4.3-5.0
0	5.4-6.1	5.4-6.1	4.6-5.4	5.1-5.8
+1	6.2-7.0	6.2-7.0	5.5-6.3	5.9-6.6
+2	7.1-7.9	7.1-7.9	6.4-7.2	6.7-7.4
+3	8.0-8.7	8.0-8.8	7.3-8.1	7.5-8.2

4. 記入票の使用法

附録 1 (原著者の許可なく無断複製を禁ず)

環境性格評定尺度
(愛育研究所牛島義友案)

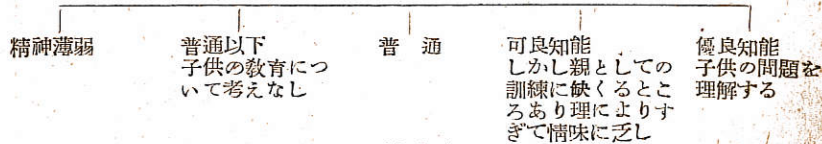
姓名 _____ 男 女
 年令 大正昭和 年 月 日生(満 年 ヶ月)
 所属 学校 学年 組
 住所 _____
 親の職業 _____
 評定者 _____ 評定日 年 月 日

	評定点	段階点
第一部		
第二部		
第三部		
綜 合		

- 指示
1. 他人と相談せず評定者の判断を記入すること。
 2. 一々の性質につき評定するときには、その点以外の性質はかえりみずに評定すること。被評定者に対する一般的好嫌の印象に左右されないこと。
 3. 評定する性質につき被評定者がどの欄に属するかを見極めてその欄の上に×印をつけること。
 4. 評定する場合に被評定者と同年令の子供たちを標準として評定すること。
 5. 評定の困難なる性質は、そのまゝにして印をつけないこと。

第一部

1 父の知能はいかなる程度か。



(以下略)

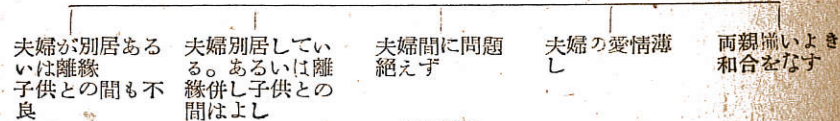
附録 2 (原著者の許可なく無断複製を禁ず)

環境性格簡易評定尺度
(愛育研究所 牛島義友案)

姓名 _____
 年令 昭和 年 月 日生(満 年 ヶ月)
 所属 学校 学年 組
 住所 _____
 親の職業 _____
 評定者 _____ 評定日 年 月 日

	○定 点	
良	+2	4.9—
	+1	4.3—4.8
普通	0	3.7—4.2
	-1	3.0—3.6
	-2	2.4—2.9
不良	-3	1.8—2.3
	-4	—1.7

1. 家庭に破婚問題はあつたかごらうか



(以下略)

結 語

私達は、以上の尺度検査を適當に使用することによつて、不良化傾向の早期予告、未然防止に努め個々の注意すべき点を追及し正しい教育指導の方針を確立しなければならぬ。

牛島義友著金子書房 定價一三〇円 (佐々木六郎)

用紙節約上、かんたんな記入票を被評定者毎に用意し、各評定項目の表を手引とし、前記のように評定点、重みをかけた修正点、平均点、段階点を出す。

一、非行検査

1. 非行の発生数に応じて採点する。即ち「ナシ」は零点、「一度」は一点、「数回」は二点。「しばしば」は三点とする。
2. 非行の種類に応じて重みをつける。
3. 非行名の次に「1」とあるものはそのまゝ、「2」は二倍「3」は三倍し最後の欄に記入する。
4. 合計して非行点とする。
5. 非行点を段階づける。

段階	男	女	非行点
+2	好ましい	好ましい	0
+1	普通	普通	1—3
0			4—13
-1		要 注 意	14—22
-2			23—42
-3			43—80
-4			81—157
-5			158—

二、性格検査

1. 素 点

(イ) 検査一

一・三・六・八・九・一〇・一三・一四・一七間は、「大体いつも」を夫々一点、二・四・五・七・一一・一二・一五・一六・一八間は「殆んどなし」を夫々一点。

3. 綜 合 点

四つの段階点の平均点をとる

上	+2
中	+1
下	0
要 注 意	-1
	-2
	-3
	-4

	検査一 徳性検査	検査二 劣等感検査	検査三 信頼性検査	検査四 信頼性検査
段階点				
+2	0	0	0—3	0
+1	1	1—2	4—7	1
0	2—3	3—5	8—12	2—3
1	4—5	6—8	13—17	4
-2	6—7	9—11	18—22	5—6
-3	8—9	12—14	23—	7
-4	10—	15—		8—9

- (ロ) 検査二
「はい」の数。
- (ハ) 検査三
「はい」の数、但し一五、一八間は「いゝえ」の数。
- (ニ) 検査四
小田の2、3、4に入つた数。印が半分入っているものは数えるが、一部分ふれている程度は数えない。

2. 段階点

附録 4 (原著者の許可なく無断複製を禁ず)

--	--

非 行 検 査
(愛育研究所 牛島義友案)

姓名				男	女
年令	大正	昭和	年	月	日生(満年ヶ月)
学校	学校		学年	組	
評定者					
評定日	昭和	年	月	日	
学年の操行点					

操行評定	最不良	不良	普通下	普通上	優良	最優良
------	-----	----	-----	-----	----	-----

裏面の表に青少年にみられる困った行動が列挙されて居ります。この一々の行動が、この子供に現われているか否か、どの程度に現われているかを、あなたの知れる範囲で、発生頻数欄の中の適当なところに(X)印をつけて下さい。
(採点表略)

附録 5 (原著者の許可なく無断複製を禁ず)

--	--

性 格 検 査
(愛育研究所 牛島義友案)

姓名			
年令			
学校			
学年	年	組	
1			
2			
3			
4			
総合			

検 査 一

次の問をよく読んであなたの態度をよく表している答の下に線を引きなさい。

- 他人をいやがるあだ名で呼ぶ事がありますか。
大休いつも 時々 ほとんどなし
- 先生が部屋を出ても真面目に勉強をつけますか。
大休いつも 時々 ほとんどなし
- あなたがしたこと他人が叱られるのを見ても放っておきますか。
大休いつも 時々 ほとんどなし
- 他の人が先生からほめられるのを聞いて自分もうれしい氣がしますか。
大休いつも 時々 ほとんどなし
- 友人の間にいる時自分は控え 他人に話をさせますか。
大休いつも 時々 ほとんどなし (以下略)

附録 3 (原著者の許可なく無断複製を禁ず)

--	--

環境性格評定尺度記入票
(愛育研究所 牛島義友案)

姓名				男	女
年令	昭和	年	月	日生(満年ヶ月)	
所属	学校		学年	組	
住所					
親の職業					
評定者					
評定日					

	評定点	段階点
第一部		
第二部		
第三部		
綜合		

評 定 項 目	評 定 点	重 み	修 正 点	評 定 項 目	評 定 点	重 み	修 正 点
第 一 部 (環境)				第 二 部 (成育生活)			
1 父の知能				1 幼児期の独立心			
2 母の知能				2 現在の独立心		1.5	
3 父の性格				3 家の手傳			
4 母の性格		1.5		4 食事の狀態		1.5	
5 家庭の經濟狀態				5 食事の習慣好惡		1.5	
6 家庭の破婚問題		2		6 睡眠時間		1.5	
7 親子の血縁關係		1.5		7 幼時期の玩具		1.5	
8 家庭内の一般的零團氣		2		8 放課後休日の遊		1.5	
9 家庭の理想		1.5		9 遊び友達		2	
10 宗教				10 学校の出席工合		2	
11 家庭の娛樂		1.5		11 学業			
12 両親の社会的適應性		1.5		12 学校に対する態度		2	
13 家庭内の規律		2		平 均			
14 子供に対する態度		2					
15 子供の家に対する態度		2					
平 均							

(裏 面 略)

ガイダンス

— 指導の理論と方法 —

(イ) 今日教育者の集るところおそくカリキュラムとガイダンスの言葉をきかないことはない。それは單に新奇なるものを求める流行の心理だけで説明されるものでなく、日々の教育実践をより善いものにしようとする眞摯な教育者の努力と悩みのあわれみでもある。しかしともすると流行を追い、好奇を求め、多く形態のみを摸して新教育実践者たる満足感に陶醉している傾が全然ないと断言できるだろうか。

さもあれこれらの傾向は新しきもの、よりよきものゝ創造の苦悶の現われであるといえよう。したがつて新しい新育の正しい方向だけの基盤としては深い思索にもとづく理論と、豊かな体験を通しての方法の習得は実に吾々にとつて緊急の要請であり切実な問題である。かゝる立場にたつてガイダンスの理論と方法を明らかにする目的を以て執筆された小見山氏のガイダンスを繙いてみよう。著者はもとゞ心理学の専攻家であり現在文部事務官としてこの方面に活躍されている。昨年指導主事講習(中等部)の講師としてガイダンスを担当したのであつたが、本書もその際の講義要項を中心にまとめられたことをまづ述べている。

(ロ) い。そして指導が基づく前提は何であらうか。とジョーンズの五項目をそれゝ説明して、各人はなんらかの方面で等しく成功できるという確信の上に、またあらゆる人は社会において一少くとも民主社会にあつては占むべき場所があるという前提にたゞなければならぬと断じ、指導方針原理に及んでいる。

(ハ) 学校が児童生徒の指導に関心をもちこれを実践する必要性と重要性を認めざるを得なくなつた理由には学校以外の教育運動、科学的諸研究等があるが、その重要なものゝ一が精神衛生である。そして適応不適応から児童生徒をみたり、問題行為の兆候や原因を探究するのに、精神衛生で明らかにした事実や原理を指導に適用することは確かに有効であると、指導と精神衛生との関係をみつめ、さらに精神衛生の目的任務をグッドやシェファフ、フエンツンの所見を引用している。

そも個人が全体的環境 物理的な自然や有機体をも含めての一部とみなされ、適応不適応の観点から個人を考察するようになつたのは新しい心理学の傾向であるが、著者はゲーッやウォラン等の説を批判しつゝ、自己の要求の満足が社会感情的と社会的責任と一体となるとき最もよき適応があり、この自己要求即ち人間の基本的要求についてブレスコットの三分類、フエンツンの七分類を参照して(1)社会の承認、(2)支配と優越、(3)新しい経験、(4)安定感、(5)独立の五つを挙げそれゝ詳細な参考を試みている。そしてまた個人の要求を重視するのは精神衛生的にみて、問題児、不適応児の根本原因の探究、児童の独自性の認識上の大きな利益となることを指摘し、

本書は二部八章に分れ第一部理論的考察、第二部方法論的考察になつてゐる。第一章指導の基盤においては新教育と指導の關聯をとりあげ、今こそわれは彼等の何ものかを求めて叫ぶ声に耳をかさなければならぬ。と個人指導の必要性を指摘し、更に現実の社会的條件、教育原理の變革、児童青年の特質と要求等の相互關連の立場から指導の重要性を必要とせよ、指導組織や施設の充實強化に熱情と努力を傾けなければならぬと主張している。すゝんでジョーンズを中心に、デューイやチザムの所見を引用し、更に一方アメリカに於ける指導運動の發達の展望を試み、指導を正しく理解し把握しようとして力めている。指導の目的についての考察はジョーンズの有名な「人生の危機的場面に關連して賢明、選択、適応、解釈を個人がなすのを助ける」を引用し、そのことは、(1)知識の獲得(2)習慣、態度、技能、興味、理想の發達、(3)賢明に問題解決をするのに直接的な援助、助言を與えることによつて達せられる。指導の分野としては學業、職業、余暇利用、健康社会性等の問題に分折されようが、個人の具体的な問題は多くそれらのもろゝに關連して單なる一分野以上のものである。さらにチザムの「第一目標生徒の問題解決」「第二目標自己指導」を掲げ、この自己指導こそ望ましいものであり、常に兒童的にはこの方向に向つて進まなくてはならぬ

多くフエンツンの言葉を引用して適応を心理學的立場から考察している。次に適応の過程を問題とし食事為例に具体的な説明を施しつゝ考察をすゝめ、そこから要求の特質を規定している。要求を阻止する要因としてゲーッの六項目を挙げてそのまゝ認め、要求の阻止と不適応の關係にすゝみ、要求の阻止を以て直ちに適応と考えることは出来ないが、その際いかにしてその緊張を解消するかによつて、ときに不適応行動を示すもので、これは社会的な問題であると、(1)「適応している」ということは倫理的な概念である」というシェファアの立場に言及している。更に適応の機構そのものに眼を轉じフエンツン、シェファア、ゲーッの分類を列挙しているが、そのまゝこれらを踏襲せず(1)進取的行動(2)補償行動(3)退行的行動と三大別してそれゝ詳細な説明を施している。このあたりは著者の専攻的立場から最も得意とするところで読者に何等かの示唆を與えるであらう。

(ニ) 第三章に於ては小学校における指導理論を概説している。まず小学校における指導概念を規定し、すべての教育は指導であり全教育課程に關與するものであると、小学校における指導の必要性を子供の具体例の中から適切に指摘している。さらに指導の原理を(1)小学校の指導計画の中心は教師である。(2)小学校における指導は教授課程、學習課程の肝要な一部である。(3)全職員が指導の効果をあげる。(4)指導には父兄其他外部との協力を必要とする。(5)小学校と中学校が協力してあたる必要がある。との五項目に分けて解説している。

第四年は中等学校の生徒指導で、まず指導の継続を主張し次に青年期の心理的特質を「変化」の一語に象徴し、青年の発達の課題をマツケージの所見を示して参考に附し著者自ら(1)個人の完成(2)身体發育と適応指導(3)望ましい友好関係(4)家族からの独立とその指導(5)社会人としての完成の五項目の立場から青年指導の原理を適切にまとめられている。

(四) 第五章以下は指導の方法論的考察で、先づ科学的研究は指導の前提である。従つてまず個々の児童生徒について廣く資料を収集し科学的に批判し解釈することが第一でなければならぬ。指導に必要な資料としては(1)個人に関する資料(2)上級学校や職業などに関する個人以外の資料に二大別して詳細に論じている。更に指導の資料としての記録をとりあげ、望ましい記録の特性として(1)累加的な記録(2)完全な記録(3)正確な記録(4)利用され得る記録であることをあげている。ついで記録の原理について项目的に列挙し、更に記録の種類に言及し特に学簿簿(児童生徒指導要録)をとりあげている。資料収集の方法としては(1)観察法(2)テスト法(3)面接法(4)質問紙法(5)事例研究について長所短所等具体的に詳細に論じている。そしてこれらの方法は研究或は調査の目的に応じて選定されるべきものであり、また一つの方法でなく、それぞれの方法の併用が好ましい場合が多く、また結果の処理に於ては図示法、数量的結果の統計的処理法も心得ておかねばならないこと、附言し、讀書の研究と工夫に訴えている。

(五) 案を協議決定することが望ましい。

次に児童生徒の共通的要求や指導の能率化から、また集團生活、集團活動は個人の円満な完成にとつて極めて重要な役割を果す立場から集團指導をとりあげている。しかし集團指導は決して児童生徒を画一的に取扱ふことではなく、共通問題において個々の児童生徒の個人的社会的発達を助長し、学校や社会の理解を深め自己の興味、適性、能力、経験、要求、問題について一層よく知ること助けけるもので、個人指導がその中核概念であり、つまり個人指導と相補い合つて指導の完全を期せられるものとしている。集團指導の技術としては、デイスカッション・フォーラム、又はバネル・デスカッション、講義、代表の報告、劇化、ラジオ、映画に幻燈等があげられるが、有能なリーダーによる形式ばらない自由討議が最も有効な一つであり、また場合により事例研究協議会もことに役立つ方法であると言っている。さらに集團指導の包含する内容についてはジョンズの九内容を代表的に掲げ、これを実施する方法として(1)ホーム・ルーム、(2)普通の教科指導、(3)特殊学級、(4)学校集会、(5)生徒会、(6)クラブ活動(7)課外活動等を挙げ、これらの内特にホーム・ルーム、生徒会、学校集会、クラブ活動の四つについて詳述している。

(六) 次に指導計画について一章をもうけ、その必要、原理と機能等について論じている。そしてこれはすべての指導の統合が結晶されなければならぬ。即ちすべての学校職員の努力や活動が統合された時に始めて個々の児童生徒の要求が充されるものであると。計画の立案にあつては一般的な原理と学校の施設や職員組織などの特殊

第六章は第二部の中核とも言ふべき技術法で、第一に個人指導の方法をあげ、指導者と被指導者の間に望ましい交流関係の成立するところが前提条件であるとし、指導助言の技術としてはウィリヤムソンの五範疇を挙げて夫々説明している。しかしこれらが一定の方式として採用されるものでなく、多くの資料に基づく個人の理解に応じた弾力性がもたれ、生徒の個性と特殊問題に即して寛容と修練があつてしるべきであると云つてゐる。一般的な個人指導の方法は指導相談であるが、これについてはザボレオンの説をあげて説明し大體それを全面的に認めている。そして指導相談の必要とする時期についてはブラグトン女史の叙述を借りて説明し、指導相談と面接との関係は考察し、次に指導相談の計画をたてるにあつて考慮しなければならぬことについては(1)すべての児童生徒におよぶような廣汎なものでなければならぬ。(2)特定の問題にのみ限定されるべきものでなく青少年の当面するものもろもろの問題を対象とすべきであるとし、指導相談の目的は(1)問題のあらゆる面が明らかにされ、それが問題の解決に対して正しく価値づけられること。(2)現在の問題の解決を図るばかりでなく將來における類似の問題の解決に資することであるというチャームの意見をとりあげ自己指導が究極のねらいであると言つてゐる。

次に指導の過程を論じ(1)問題の確認、(2)問題に関聯するあらゆる事実や情報の収集、(3)問題解決試案作成、(4)試案の実証的批判や評價、(5)特定の解決処置の採用表は拒否、となしてゐる。そして児童生徒が著しく困難な問題を有するとき、児童生徒に関係ある人たち(例、校長、担任教師、校医、専門家等)などの事例研究会で解決条件を考察することが根本であるとし、エリクソンやスミスのの説を紹介している。更に指導計画に含まれる内容として(1)資料蒐集の計画(2)個人の指導助言の計画(3)集團指導の計画(4)記録の方法、形式、保存、整理計画(5)職員参加とその任務の計画(6)両親社会との協力計画(7)専門家の参加の計画(8)卒業後の追隨研究の計画をあげ夫々解説を施し、これを実施するにあつては綜合と均衡が計られなければならない。また作製された指導計画を全職員に徹底させ実践を評價し、常に反省と批判がなされなければならない。指導職員組織については校長、一般教師、ホーム・ルーム教師、カウンセラー、ピアジテンゲティチャ・デイン等の職能を考察している。帰するところそれは指導計画に統一性をもたせるものであり、相互に協力し調和をはかるために委員会を構成することも望ましいと言つてゐる。

最後に指導と評價の章に於ては、先づ評價の一般的な原理を扱い、ついで指導計画の評價の観点や領域について詳述している。即ち(1)指導の原理性格について、(2)指導組織について、(3)指導方法について(4)指導の結果について、(5)資料について、それら細目を挙げてその内容を規定している。これを実施するにはテスト、質問紙、チェックリストなどの方法や討議による反省などがあるが評價しようとするものがらに依つて適切な方法を選定すべきである。次に評價の実施の研究の一節を設けアメリカの「八年研究」に於て行はれた評價研究の紹介をやつてゐるが、評價の一般的研究には非常に参考になるだろう。

以上極めて平板的に本書の内容について述べてみたのであるが、

表現の拙さから著者の眞意を過脱したことを詫言いたい。この書はガイダンスの概説であり、一般的に抽象的、平板的なうらみがあるけれども、一面なか／＼がつちりしたものでガイダンスに興味を有

する方々、特にその理解を究明したい方には是非一読の程をおすすめてほしい。
(小見山栄一著 金子書房 一八〇円) (木島記)

家庭科指導要義

最近諸教科の指導書は巷間に氾濫しているが、所謂新しい教育理念をもとに小中高に通ずるよう書かれた家庭科の指導書は極めて少い。時々家庭科指導原理、家庭科学習指導書等の発刊を見て非常な期待をもつて目次を開いて見ると、育児、衛生、食物、住居、看護、経済等、従来の家事科の教材蒐集録にすぎなかつたり、又小学校だけの学習指導にとゞまるようなもので極めて低調であつた。然しこれは無理のないことで、眞に新しい家庭科教育のあり方を理解し小中高の教育に通ずる人が従来少かつた上に、家庭科は比較的他教科に比しその地位の重要性は認められなかつたし、又家庭科教育にたゞざる実家の執筆がこれまで余りにも少かつたこと等に原因するものと思う。こうした時に内容に於て多少未しの感はあるにしても、文部省検定官で然も新制度の家庭科立案者であり編集者である林氏の、「家庭科指導要義」の発刊をみたことは誠に意義深い。次に同書内容の要約を試みたいと思う。

全文五章から成り、第一章家庭生活の民主化、第二章新教育と家庭科、第三章小学校の家庭科、第四章家庭科指導の実際、第五章家庭科の指導の意義をさがすために憲法にさかのぼつて、家庭科の教科が成立するに至つた法的根拠を明かにしている。従来の家事科と新しい家庭科との違いを教育基本をもとにして説いているのも興味ある問題である。即ち教育基本法に示されている労働と責任、自主的精神にみちた健康な心身をもつて、平和的な国家及び社会の形成者となり得る素養、又どこでも実際の生活に即して、自学的精神、自他の敬愛と協力によつて文化の創造と発展に貢献し得る実力の養成は、家庭科が実現し得る本来のものであつて、従来の余りにも狭義の実用性に偏しておつた家事科より遙かに幅の廣い家庭科でなければならぬことを明らかにしているのである。

更に氏は新教科課程の成立の所以をとき従来のもとの最も異なるのは家庭科と社会科であることを強調している。家庭科の場合は従来の家事裁縫がとつてかわつたものではない。そして男女共に中学まではこれを課することを建前とする重大な使命をもつていのである。その理由は、既に教育基本法や学校教育法の解説で明かにされたことであるが、新しい家庭科の性格をもつと掘り下げて考察すると、実際の生活に於て家庭の重要性をみると、家庭建設者として自己の生長と責任の分担によつて明るい家庭の生活を営んで行く、基礎的教養を高めるために設けられた教科である。第一章でも述べたように、日本の家庭からその封建性を除き誰にとつても明るい家庭生活が出来るような家庭を作ることが急務であつて、家庭科はそこに第一目標をおくのである。第二には各人を有能な一員として自分の能力にしたがつて、家庭に、社会に貢献出来るようにすることである。従来の家事教育に往々免れなかつた家

庭科指導の用意(主として施設)の順である。家庭生活の民主化の章では、先づ従来考えられて居つた家庭の機能を分析しその非民主的、非科学的、非文化的な面に鋭い批判を下した後に、今日日本が当面している近代的民主的社会的形成のためには、その基盤である家庭が先づ新しいモラルに立脚して建設されなければならない。この事は現在の日本が国家再建のためになすべき最大急務である。教科の種類によつては必ずしも国の現状によつて考慮される必要の少ないものもある。純科学に属するものはそれである。勿論国民教育の大方向の中にあつて重点のおき処注意の拂ひ方に無関心であつてはならないが、以上のような国家再建という大きな役割と直接的な関係有すること、家庭科の教科程著しいものはない。と説いて次の新教育と家庭科の章に発展して行くのである。

この章では全員の約半数を要して新しい家庭科のあり方を述べている。先づ六三制の教育にとりなつて新しく生れた家庭科を理解するには、教育基本法と学校教育法の二つの法律を、そしてその源である日本国憲法を知らねばならぬ、といふことから、前掲六三制の「教育」を守る言葉に於ける、狭い家庭科主義や、それに伴う女子生活の非社会性は、女子の最もしりぞくべき点である。第三には家庭生活の充実向上をはかつて行く常識と技能とを身につけることを学ばなければならない。

以上の目標達成のためには、「家族関係」「家庭の仕事」を指導内容としてとり挙げるのである。家庭の仕事の中には勿論裁縫、調理もある。然し家庭建設のためにはそれらの仕事以外になすべき事が沢山ある。これからの家庭建設は、民主的文化的平和国家を興すために、男も女も老も若きも、献身的努力を拂つて家人に、友人に隣人に奉仕する連綿的な活動でなければならぬ。

要するに林氏は以上のような家庭科の性格をしつかり把握した上で三つの目標に向つて、家庭科の学習は展開されて行くべきであると言つてゐる。そしてこの学習を指導するためには、先づ学習指導要領の一般篇と家庭科篇の熟読が必要である。殊に小学校の家庭科は教科書がないのであるから、指導要領をよむことなしでは指導出来ない。

指導要領には家庭科指導上の原則として、一問題の発見、二調査、三討議、四観察、五記録、六実習、七示範、八説明講義、になつていてこの中から観察、記録、実習、示範の四つをとつたらブラック・ティカル・アートとしての家庭科は成り立たない。家庭科の指導は観察、記録、実習を重視する。一般に指導の段階については、導入、学習活動整理(最後に活用応用をおくこともあるがこれは指導の効果の範囲に属するものと考えられる。)の順序が一般段階である。これを家庭科の学習にあてはめれば興味をおこすとか関心をも

つ等が導入である。次に「自覚する」「理解する」「覚える」という一連の言葉と「会得する」「習得する」「作る」という一連の言葉が学習活動の展開に当る段階で家庭科学習指導の中心であり眼目である。「整理の段階」はいわゆる「まとめ」であつて、「調査」「観察」「記録」「実習」したことにわたる「まとめ」で報告することなどによつて完了する。そしてこの整理の段階から「反省」とか「発展」とか「進歩させる」ということが生れて来るのである。

要するに家庭科学習指導の段階は興味と関心による問題の発見に始まり、理解習得から会得への中心段階を経て、「整理」「発展」の段階に終るのが一般であると述べているのである。そしてこの具体例を小学校の家庭科教員に求めて、二種類挙げられているがこれに對する著者の説明は一言もない。

最後の家庭科指導の用意として挙げてある施設基準は余りにも貧弱すぎる感がある。

子どもを生かす學級指導

教育の実践人に課せられた大きな二面は教育の内容と方法上の問題であろう。教育の目指す所が、個人の價値を尊び人格の完成を計り以て個性豊かな文化の創造をなし得る人を育成する所にあるとすればその教育の内容に於ても、方法に於てもそれは国家基準を重んじ乍らそこには社会的に個人的に特色のあるものでなければならぬ。傳統的な教育が一つの国家目的の立場から極端にその内容

直され考え直されねばならぬ必然性が生じてきた。カリキュラムの問題の熱心な研究は誠に喜ばしい事であるが、單元の設定展開、又は基礎学習、訓育の問題等に關して今大きな反省檢討を加えねばならぬ幾多の事柄が吾々の前に展開されている。倉富氏はこれらの諸問題について氏の尊い体験を基にして信念を吐露していられる。今こゝに氏の体験が如何に新教育について生かされ世の実践人に大きな示唆を興えているかを知る事にする。

○教育計画のたて方

子供を扱う教育者の悩みは多い。各々異つた個性と能力を持つた多くの子供を一教室に集めてこれを一定の目標に向つてその全生活を導き磨いて行く。この多くの分野を担当している吾々の心も又分散してしまふ。又多くの子供の中には所謂「問題児」があつて特異な行動を示すが教師は多くの子供を扱つてゐるため遂にその子供を考へる余裕を失ふ事がある。これらの子供を持ち乍ら教師は一定の計画によつて教育を進めしめて行く所に多くの焦燥を覚えるのである。吾々は傳統的な殻を破ろうとして、新しい殻の囚になり却つて自分の子供の頭上を新教育の理論が華やかに空轉している事が多い。吾々は常に子供の實態をよく知り応病施藥的に子供の現実の欠陥に對処する方法を考え、わかりやすい計画を立てればならない。子供の現実をみつめる法を次の三つの角度から立ててみたい。

第一の角度

1. 彼らはその眞實な欲求に基づいて全身全霊を打ちこんで継続的に發展して行く活動をしているか。

林氏の家庭科指導論は学習指導要領の一般篇と家庭科篇から出發するもので、一応小、中、高を通じての指導原理はつかむことが出来る。然し家庭科教育の實際家でないために、指導要領の最初の十数頁を引きのばし、教育理論を説くことにのみ忠実すぎて、現在高等学校に始まり中学校、小学校にまでとり入れられようとしているホーム・プロジェクトの枠格に、「一言もふれていないのはいさゝか心細い。家庭科関係の図書紹介を書くに至り随分あれこれとあきつたがなかなか豊富な内容のものに出遇わない。この書は比較的新しい家庭科のあり方が説かれてゐる方である。

今後新しい家庭科について、自己の実践を確心をもつて語ることの出来る人が續出することを、期待して已まない次第である。

林実元著 B六、二三四頁 中和書院發行 二〇〇四

(小林)

の劃一、統制を計り、個の力の伸張をおさえ、方法論に於ても僅かにそのテクニクに自由を與えなすにすぎなかつた。悲惨な敗戦の現実から立ち上り新しい世界觀に立つ教育は飽く迄民主社会を形成するに必要な理解、態度、能力、技能の伸張を目指しそこに内容に於ても方法に於ても個性味のあるものでなければならぬ。そこに新しい教育計劃、即ちカリキュラムの問題が教育界の問題として見

2. 彼らは自分達の問題について眞剣な共同生活を営んでいるか。

3. 彼らは自然や社会に對して合理的に処理し順序し改善していく力が高まつているか。

第二の角度

1. 彼らは現在及び爾後の生活に必要な技能が末端に及んで、たしかに磨かれてゐるか。

2. 彼らは正確な知識を身につけて、それを有効に使つてゐるか。

3. 彼らは健康で心情は豊かであるか。

第三の角度

1. 彼らは基本的欲求は満たされ、属する社会に位置をかくとくし相互に仲よく生活してゐるか。

2. 彼らはその属している社会に對して眞に貢献しようとする態度が高まつてゐるか。

3. 彼等は自己及び自然、社会を對象として持ち、それをはつきりと意識する方向に進んでいるか。

○單元の展開

單元の展開に先だつて考えられる問題は「しごと」の計画である。「しごと」の計画に當つて前述の第一の角度を目標として考へる時、子供が眞實の欲求がある時そこにこそ継続發展的な学習が展開される。個の完成と社会の完成は人間の眞實なる共同生活の中に於てのみ行はれる時、学習の計画に於ても目標達成に對し仕事の分担、責任の所在、共同生活の諸要素を培われなければならない。更に人間は自然及び社会の中で生活している事実から彼らをして自然や社会

の中にあつてこれを合理的に処理し順応して行く力を育成する事が大切である。この様な立場から「仕事」の段階を次の三段階に分けて考えられると思う。

計画の第一段階

この段階では話し合いや調査によつて学年相応の興味を中心としその学習活動の種類と可能な段階を明かにする事である。学習活動の根底は「なす事によつて学ぶ」事であり具体的には「手や体を動かす」ことである。劇化活動、製作活動、それらに随伴する活動等これを学年相応に配列する事が必要である。

計画の第二段階

この段階は学習の内容を考える事である。内容は子供を含む環境としての自然物や道具や社会的なものの中から求められる。その内容を選び出すには教育の一般目標各教科各学年の目標に到る一連の系列がある。又教育の目標を考えるに当つては学校の所在する所や村の課題を合わせ考える必要がある。

計画の第三段階

配列の段階である。選ばれた内容を子供らの関心の推移や季節、行事などを考え合わせそれが自然的に発展して行く予想の下に配列する。この配列に当つて学習活動の主眼、資料、材料道具、学習環境、学習の程度、予想される子供らの問題としての学習展開、即ち一つの仕事の始めから終り迄の活動の様子を予想する事が必要である。

○実力の練磨

教育書によつても解決し得ない三人の子供を大らかに伸張させた同氏の教育信念は吾々実践人に大きな感激を與えずにはおかないであらう。祖母の厳格な干渉から母の愛を求めて止まぬN君、弟の出生によつて母の愛を独占し得ないK君、奔放な生活のM君、これらは何れも教師の愛の眼を以てして観察の結果安定感を以て学校生活を爲し、遂に他の仲間を驚かす子供に轉移した事実。問題の子らは決して感激性がないのではない。温い言葉に対しては嬉し涙を流して感激する子供なのだ。教師はやゝもすると温い言葉を忘れる事が

カリキュラム改造——その歴史的展開

本書は第九章三四〇頁よりなつてゐる。今各章毎ににその梗概を略述して該書の紹介としたい。

第一章 二つの原型(古氏と中世)

現在カリキュラム改造運動者より適視されている学校カリキュラムは学校という近代文化施設がその長い成長の過程を経てから得た偉大な成果であるがその発達の初期に於ては單純素朴なものであり二つのカリキュラムの型があつた。即ちギリシヤ、ローマ時代の「七自由科」(文法、修辭、弁証、算術、音楽、幾何、天文)はギリシヤ文化一千年の成果として学校カリキュラムの完成品であつたのである。又その性格はギリシヤの発展と相まつてヘレニズム的なヒューマニ

教育計画の第二の角度から考察される問題である、戦時下の教育力の底下か、新教育の誤れる実践の結果か、技能は末端に及んで果して磨かれてゐるか多くの疑問を投げられてゐる。然し技能は單なる才能であつてはならない。それは人間の好ましい状態を現わす理解、態度、能力と結び又技能の内に包まれて活動となつて現われるものでなければならぬ。進歩的な教育は有能な社会人の育成であるから教育は理解を内に包み乍ら能力に焦点をおいて計画される事が必要である、能力表の問題が研究されて來た事は進歩的な教育を正しく焦点づけるため眞に必要な課題である。こゝに同氏の学校に於ける各種能力指導系統表を示してゐる。

(1)言語能力 (2)社会的生産能力 (3)算数的能力 (4)自然科学的能力 (5)音楽的能力 (6)図画的能力 (7)工作的能力 (8)家庭生活的能力 (9)身体的能力 (10)衛生的能力 (11)ダンス能力

是等の能力の中に更に細かな指導能力系統と技能方面の具体的な設定が見られる。現下カリキュラム運動は誠に活況を呈している。然し常に所謂用具教科とされている所の基礎力の陶冶には今後諸調査に基づいた能力系統表を作製して新教育の線に沿う力ある教育実践に当る事が必要である。

○訓育の問題

吾々が扱つてゐる組の子供の中には大抵は例外なしに問題の子がいる。精神的に又は身体的に必ず教師を悩ましめる者がいる。特に精神的に問題のある子供は教師の教育的エネルギーを莫大に吸収しても尙問題児でしかあり得ない場合が多い。幾多の問題児に関する多い。問題の子は環境から働きかける好ましくない力を与える力の弱い子である。問題の子らは温かい言葉をかけてもらいたいばかりに問題の子らとなつてゐるのである。問題の子らは眞実の人間性を露呈し基本的欲求を現わして求めている子らである。問題の子らを通して私達は所謂人間性や基本的欲求をとらえることができる。問題の子らは先生の先生である。

(菊地)

奈崇良女高師用小教諭倉富人著 誠文堂発行 一二〇四

第二章 近代カリキュラムの端緒

ズム的であつてヨーロッパにおけるカリキュラムの原型である。このようなヘレニズム的カリキュラムに対して全く性格を異にするキリスト教的カリキュラムを見出すことが出来る。それはヘレニズムの否定ではなくてその中心統合であつた。即ちキリスト教義をコアとして七自由科をその周辺に配置するという方法であつた。之がヨーロッパの学校カリキュラムの第二の原型である。

ルネッサンスはヨーロッパにおける近代文化の端緒であり近代的自我の自覚の時代であり又一面商業交通が隆盛を極め諸国の商人が集散する國際的コスモポリタンの商業都市が発達したのでその文化

は世俗的裝飾的、非宗教的で無中心であるのは当然であつた。それはカトリック的文化をすて、ヘレニズム的文化を復活しようとするものであつた。従つてそれは中世的な宗教專制的なコアカリキュラムにたいして革新の火の手はあげられた。それはフランスのラ・シャロツティ等を中心とする啓蒙主義者達とベスタロツチを中心とする新人文主義者達によつてである。前者に於ては宗教を學校から完全に締め出しコアを持たない近代的な多教科並列カリキュラムの原型であり後者に於てはその新人文主義的人間觀に立つて一面に於ては人間性の平等他面に於ては道徳科学技術の平等調和を主張したかゝる人文主義の理念に基礎づけられてこゝに民衆教育の新しいカリキュラム構造理念が生じ近代的な諸教科調和カリキュラムが出現した。

第三章 新しい傳統のカリキュラムの成立

ルネッサンスの自由主義はやがて次に來る新しい社會と文化とに席をゆづつて歴史の舞台から身を引いた。宗教改革の時代がルネッサンスの時代によつて代り、嚴肅で禁欲的で敬虔なプロテスタントの時代が來た。それと共に學校のカリキュラムは中世的な宗教專制のコアカリキュラムに逆戻りした。プロテスタントの教育上における歴史的意義の重要な一つは全民衆を対象とする義務教育制度への志向であつた。そのカリキュラムは三百数十年の間一貫してキリスト教主義の注入をコアとするものであつた。代表者コメニウスのカリキュラム論は中世的宗教專制的なコアカリキュラムと近代的百科全書カリキュラムの調和結合を企てたものである。宗教が中核をなし、而も近代的な科学技術の多面的内容を包攝しようとした彼の意図は、現代のカリキュラムへの進動への始動として注目せらるべき点である。

第四章 カリキュラムの近代化の動向

專管に委ねることの不合理を早くもさと、そのカリキュラムも非宗教的超宗派的な近代的並列カリキュラムに出來上つていつたのである。

第六章 新カリキュラムへの探究

十九世紀の初期のドイツに於て人文主義的進歩主義者のもとに新しい多教科カリキュラムが成立しつゝあつたと共に一方に於て同じ進歩的な思想を抱く人達の間に羅列的なカリキュラムに不満を唱え之等を集約し綜合して新たなカリキュラムを構成しようとする試みがあつた。ヘルバルト・ハルニツシュ、グラザーである。もとゝゝ集約的なコアカリキュラムは十七世紀以來の宗教的專制カリキュラムにその起りを見たものでいわば保守主義の遺産であつた。の教育方式を進歩主義者は新しいカリキュラムの方式に活用したものである。この主張はこの時以來カリキュラム改造論上の中心テーマとなつた。新しいカリキュラムは單なる羅列のカリキュラムと宗教と言語をコアとする專制カリキュラムを綜合止揚することを目的としたもので経験カリキュラム、生活カリキュラムの先驅をなすものである。

第七章 反動時代のカリキュラム論

十九世紀中期のドイツにおける反動カリキュラムとしてチラーの中心統合法とロスメッスラーの總合理科カリキュラム論をとりあげること出来る前者は政府の反動に迎合之に調子を合せ之を理論的に正当化しようとするもので全カリキュラムの中核に宗教科をすえん

第五章 カリキュラム近代化の進行

十九世紀は前世紀の近代化の影響をうけたので世界の文化國家は概ね近代化された初等カリキュラムを持つに至つた。先づプロシヤに於ては一時保守反動的であつたが一八七二年フアルク文相就任以後新人文主義ベスタロツチ主義が復活し從來の宗教、國語、算術、唱歌の他に幾何、圖画、地理科が加えられた。

フランスも十九世紀の後期になつて徹底的に近代化し終に宗教がカリキュラムから姿を消し、それに代つて道徳及び公民科が登場し更に組織技能の殆ど全領域に亘る近代的な教科が網羅された。

イギリスも多年の懸案を終に解決して「初等教育令」を公布して民主教育の支配権を教會から奪取することに成功しそこに非宗教的な世俗的な多教科並列カリキュラムが成立した。

アメリカ合衆國は民族や宗教の多様性から學校を特定の一宗派の

とするものであり後者は進歩主義の立場を守りねき、その立場から攻撃を敢てするものであり、理科を以て全カリキュラムの中心たらしめんとするものである。

之等兩論は当代の反動政策に対する迎合と攻撃保守と進歩との對立的な立場にも拘らず他面に於ては共に統合或は綜合カリキュラム論であつて、カリキュラム構造論の上からは共に單なる多教科並列主義を否定しようとするものである。保守も進歩も素朴な百科全書主義のカリキュラムや宗教中心のコアカリキュラムをも認めないというわけで、そこに合理的カリキュラムの形成が予想されるのである。

第八章 「現代直前」における新カリキュラム

宗教中心の根本性格を持つチラーの保守反動的な中心統合法はも早時代の支配的な教育論として教育界の主流をなすことはできない時代が來ていた。十九世紀末葉の中心統合法カリキュラム論の最後の段階を飾るものとしてもつとも典型的なものでありヨロツバの長い宗教的專制國家的權力による余蘊の段階のカリキュラムとして古きものを残しつゝ、而も新しきものを開拓しようとする過渡的カリキュラムとして最も模式的なものはドイツのバイエルであつた。彼はチラー的な道徳的宗教的心情教材のコアと自然科学的教材のコアとを持つたカリキュラムを作つた。現代のカリキュラムはこのカリキュラムより宗教と專制國家的權力の完全消失という一歩に外ならなく現代直前のカリキュラムであるといつてよいのである。

第九章 二十世紀のカリキュラム運動

二十世紀初頭に現れた新教育運動は三つの性格を異にする二つの国に於て行われた。

その一は社会民主主義のドイツであり、その二は共産主義のロシアであり、その三はブルジョア民主主義のアメリカである。それで三つのカリキュラム改造運動をたどることが現代カリキュラム史の主題である。

(一)ドイツの合科教授運動

ドイツのカリキュラム運動を代表するものは合科教授という運動である。之は單なる諸教科目の無中心的なつなぎ合せでなく、郷土科と自然科とを融合したものをコアとするコアカリキュラムである。これは民主的自由主義的な教育運動であつた爲にヒットラーの独裁政治と共に影をひそめてしまった。

(二)ソヴェートロシアのコンプレックス

二十世紀初頭のロシアは教育の面では世界で最も暗黒な国の一つであつた。ところが一九一七年の共産主義の革命以來教育改革について熱心に動き出して來た。即ち小学校のカリキュラムはアメリカのプロジエクトメソッドとドイツの合科教授とを併せる超教科的総合のカリキュラムを構成した。而も之はソ連の現實に対して余りに高

踏的な理想主義であつた爲に廢止されて教科カリキュラムに逆轉した。

(三)アメリカのコアカリキュラム

アメリカのカリキュラム改造の組織的な実行についてはソ連やドイツに先を超された形であつたが、ソ連やドイツは何れも停頓後退してしまつたが、獨りアメリカは劃期的前進を始め今日の世界の教育界に指導的役割を演じようとしているのである。その運動の根本的特色は初等中等学校一貫のカリキュラムの制定である。而も之は国家權力によつて一律に強制されるカリキュラム改造でない所に一つの特色はあるが、この民主的な運動が果してアメリカ社会に於て実を結ぶかどうか我々の眼で冷静に眺めつゝ我々のカリキュラム改造について正しい歩みを進むべきである。

所感 カリキュラム改造運動は諸事情の制約を受けて実に容易でない事業である。而し全面的禁止が最もよいというのでは決してない。今日の日本の進むべき道は先行国の実験の跡に鑑み、その轍を踏まぬより一歩／＼着実に実践し、その成果を蓄積してゆくことであると思ふ。そんな意味から云つてもこの本は日本におけるこの方面の運動について大きな示唆を與えているのではなからうか。敢て一讀を推奨する所以である。

(文理大助教授梅根悟者 金子書房 二五〇円)

生活カリキュラムと國語學習

兒童の學習生活、社会生活の根柢をなしているものは國語であり、國語生活のない所に生活はないのであるが、社会科が學習の中心となり、カリキュラムの問題がとりあげられてからとかく國語の學習指導がおろそかになつてきつた。カリキュラムに於ても中心學習から離れ周辺の學習として位置づけられ、而も基礎教科の重要な位置にあるにもかかわらず「如何にしてその學習指導を進めて行けばよいか中心學習との關係はどうしていけばよいのか。」等迷つてゐる現實である。小島先生は本書に於て、新しい國語學習指導のあり方を論じているが吾々の日々の學習指導に多大のしさを與えるものと信じ一読をすゝめ要点を紹介する。

一、新教育を地につけるには

「新教育を地につけるにはいかにすべきか。」は教育の現場に課せられた大きな現實的課題である。この事について、次の如く論じてゐる。

1. 新教育を地につけるには、社会と学校が教育的に一体となつて活動されなければならない。即ち生活カリキュラムを作ること。
2. 新教育の目標は、よい社会人を育成し、よりよい民主的な社会を建設しようとするところであり、それに即した教育方法がとられなければならない。即ち學習指導を自主的、自発的にすること。
3. 兒童の生活活動、學習活動とともに動いていく生き生きした環境がなければならない。即ち生活環境を力動的に構成すること。
4. 新教育で最も必要なことは、兒童生徒への深い愛情である。眞の教育愛こそ、新教育を地につける原動力であると。

二、生活カリキュラムの構成

生活カリキュラムは地域、社会の實態調査と兒童の實態調査、とくに兒童の經驗領域、関心、興味、生活能力(學習能力)の發達を正確にとらえ、教育目標を具体的に設定して、生活單元を構成することが必要であるとし。

1. 生活カリキュラムの動向として

東京第三師範小、明石附小、櫻田、石川プランの紹介をし、エバリーエーションの問題が、科学的正確さを欠いては、今後のカリキュラムは地についたものとはならないと

2. 生活カリキュラムの構成として

東京高師附小カリキュラム構成を紹介している。

3. 生活カリキュラムの修正

東京高師附小が生活カリキュラムを修正し、コアカリキュラムに向つたこと。

三、生活カリキュラムと國語學習指導のありかた。

新教育における實踐的課題の一つは、中心の學習と、周辺の學習、基礎的學習をどのように展開するかにある。この實踐課題にとりくみ「生活カリキュラムにおける國語學習は、どのような位置と領域をもち、どのように學習指導をなすべきか」を論じ、

1. 話合い、意見発表、討議が正しく行われるようにすることは、國語教育の重大な任務であり、使命である。
2. 兒童を、國語読本によつて、棒しばりにした國語學習から自発的、自主的な國語學習にするのが、新しい國語學習指導の姿である。
3. 國語學習指導の領域として、基礎的な言語活動、社会的な言語活動、文藝的な言語活動の三つをわけ、基礎的な言語活動と、その

学習指導は、今後の国語指導が最も力をそぐべき部面である。社会的な言語活動とその学習指導では、学習環境が大切となつて来る。文藝的な言語活動とその指導で必要なことは、読書であり文表現の指導である。

4. 生活経験（目による活動、耳による活動、口による活動、文書の活動）とその指導のあり方を論じている。

四、国語学習カリキュラムの構成とその実践
生活カリキュラムにおける国語の学習は、従来の教科学習としての単なる国語の学習ではなく、「生活する国語学習」である。言語（国語）は生活の重要な社会的用具であつて、この用具を正しく身につけ、使いこなすことによつて、生活の向上発展をはかることが大切である。こうした考によつて国語学習カリキュラムの構成をなし、その実践をこころみる必要があるとつてくる。

小学校における国語学習の大きな見通しを、低学年は国語の基礎的なことをたのしく学ばせ、中学年は国語生活をひろげ、高学年は国語生活を深めることにおくが、実際指導上、問題になつて来るのは国語学習カリキュラムの構成である。国語教科書とにかゝる児童に全篇よみ通させて、そうした読書のもとに児童と教師とによつて單元を構成し、その單元を中心において読解を正確にし、意味を味わい、思想を深め、むづかしい文字語句については反復練習をなして、国語学習によつて生活を学ぶとともにいわゆる国語の力を身につけていくように教科書を活用して、児童が自主的、自発的に学習活動を展開していかねばならないといふ次の要点をあげている。

1. 国語学習指導の範囲は、社会科課程の諸單元が主となりこれを中心

へ、高学年周辺の国語学習指導 多角的に発展して来た国語生活を、深くほりさげ正しいことば、命のかよつてゐることばを身につけさせると共に、学習を通して眞実の生活を探究させ生活態度の向上をはかることが大切であるとし、五、六年の実際例を示す。

五、学習効果の判定

「学習効果の判定が正しくおこなわれ、それに対する処置が適切になされなければ新教育は地について実践されないし、新教育は眞教育とならない」といふものの実際にはまだ科学的な自信をもつてこれを実践展開していくまでには至つていない現状であるといつて、先生が試みた判定の仕方述べている。

1. 学習効果判定に対する方針、態度

学習効果の判定は教師、児童、社会の三つの立場からおこなわれる。教師の立場は児童の理解、態度、能力を判定し学習の手がかりとし指導の反省とする。児童の立場は自己の理解、態度、能力、学習成績を反省自覚し、新たな学習意欲をおこして、学習活動を展開していく資料とする。社会の立場は保護者、地域社会の人々の教育にたいする関心を持たせ、積極的に教育に協力するきつかけとなり資料とする。

2. 中核学習の効果判定として五、六学年について試みた実際例を示し

核学習とし、その中核学習から派生する学習及び中核学習の基礎

となる学習を周辺学習とする。即ち指導要領にあげている国語科としての指導範囲は、主として周辺学習の一つの領域とし、同じく連関をはかるものの中、学校生活の諸経験、家庭、その他一般社会生活の諸経験をせまい意味のガイダンスとする。

2. カリキュラムメイキングにおいてもつとも大切なことは、教育目標を具体的に持つことである。その目標は教育基本法に示してある。

3. 国語学習単元の構成として、興水実氏の国語学習の單元を紹介し、国語学習は国語学習の生活化ではなく生活の国語学習化でなければならぬ。

4. 国語学習のカリキュラムとして各学年の生活單元と目標を示し、中核の国語学習、周辺の国語学習、ガイダンス、環境行事の四項を設けて試案を示している。

5. 生活する国語学習指導の実際として

① 中核学習指導の実際例を低、中、高学年に分けて取扱い方を示している。

② 周辺の国語学習指導

イ、低学年周辺の国語学習指導 学習活動を多様にし変化をもたせ興味をもつてしらすしめずのうちに基礎的な能力が身につくように指導するとし、一、二年指導の実際例を示す。
ロ、中学年周辺の国語学習指導 基礎的な低学年の教育を基礎として、多角的にひろげ、国語生活をゆたかにし国語の力をつけていくことが大切であるとし、三、四年の実際例を示す。

ている。

3. 周辺学習の効果判定

学習効果判定の規準となるものは、学習目標であり学習活動とともにおこなわれていくものでなければならぬといつて五年の例を示す。

4. 国語能力評価の基準 国語学習指導の目標を次の大項目に分けて、能力評価の基準を示している。

- ① 人の話を正しく聞きとつて理解する能力。
 - ② 相手によくわかるように、正しくはつきりとその場にふさわしく言語表現する能力。
 - ③ 文字を正しく早くきれいに書く能力。
 - ④ 文章を正しく早くきれいにつづる能力。
 - ⑤ 文章を正しく早く読みとつて理解する能力。
 - ⑥ そのほかの能力、態度
- 評価は「良い」「やゝ良い」「普通」「やゝ劣る」「劣る」の五段階に分けてする。

各学年の評価の基準は①話す、聞く。②作文。③読む。④書く。に分けて示している。なおくわしいことは本書を参照していただきたい。（佐竹）

（小島忠治著 二九五頁 教育文化出版社二五〇四）

新制中學校と職業指導

新学制の発足とともに、新制中学校の重要な教科目として、新に

職業科が設けられ、職業指導が重要な内容としてとりあげられてい

るところである。本書は昭和二十二年夏二十日間に亘つて、東京大学において、文部省主催で開催された職業指導幹部養成講座の講義を中心として編さんしたものである。その内容は第一篇、新制中学校の性格、第二篇職業指導概説、第三篇職業研究、第四篇個性調査、第五篇教育相談、職業相談、第六篇労働問題、産業政策からなり十九氏によつて執筆されている。

新制中学校職業科の性格——戸田貞三博士。新制中学校は国民として最小限度の普通教育を施すのが趣旨である。従つてすべての科目は普通教育科目で職業科も従来のような実業教育をなすものではない。国民は先づ働くことにおいて生活し、それが国民に役立つのである。国民が働くという氣持をもつようにならなければならない。国民生活に一番大切なものは働くことである。職業科においては働くことのために、或る程度の技術教育が必要であるが技術教育それ自体に目的をもつ専門の技術教育をなすのではなく、働く精神をもたせるための目的で技術を得させるのである。

次に重要なことは職業科は將來の職業に直接に役立つものを教えるようにするものではない。中学校の生徒は職業選択の段階にあるのだから、たゞ一つの作業だけに仕向けてはならない。最初はだれでも出来るような一般的な内容の教育をやる。生徒のもつ適性に應じて職業が得られるように、つまり適職を選べるようにいろいろの経験を得させる。そして或る一つの作業をやらせるとしても、その作業と他の仕事との関連を研究させる。農家のなかの仕事をやらせても他の商業、工業、紡績や貿易との関連を学習せよとするのである。具体的な人間生活はすべての職業と関係しているのであるか

陶冶をかわ行り時期である。右の教育段階はその各段階における教科課程を規定するわけで、義務教育は国民全体に共通する一般教養——この意味における普通教育を行つのであるから、そこでは特定の職業の専門教育は意図されない基礎的なものであるから各人の希望によつて、その修める内容を選択する余地は設けられない。小学校四年以上の自由研究は個性を形成することや、専門的な方向にむかわせることを意図しているのではなく、興味や欲求に応じて自主的に学習する態度を養うことにある。つまり目的としての個性教育ではなく、方法としての個性教育が主眼である。

中学校においては各人の修める課程に差別の生ずることを認め選択教科を設けたものである。これ等は自己を試練する試行課程としての意味をもつものである。青年前期になると自我を発見して内容的傾向が著しくなり、自己が何であるかを自問しつゝそれに答えるために自己の向わんとする方向に生活計画をたてゝそれに打込んだ体験を積み、しかも同一の方向を系統的に追求することが出来る、動搖し変化して、各種の生活形式を試みるものである。このような心理的特質に應じて、中学校の全教科、全生活が試行的意味を有するのであるが、とくに選択教師はこの試行を積極的なすべき機会を與えるのである。

高等学校教育は目的としての個性教育、専門的教育、職業教育の出発点である。だから高等学校の教科課程は全市の選択を許し各自の修める内容に大きな差別があることを認めるようになる。

次に職業指導を考える時、その前に全生活を指導する生活指導 (guidance) を考えねばならぬ。その生活指導の一環として具体性

ら、学校の所在地を背景として、その全体との関連がどうなつていのかを理解させるためには現実に在る一定の職業の経験を基礎としての他の職業と関連を理解せよとするのであるといつてゐる。このことは職業の社会的経済的意義の理解は單なる知識の提供による理解ではなく仕事・作業を通じて自己の適性を理解し開発して、職業一般に関する理解をなさしめようとするので作業、実習と職業の知識・知的理解を切り離されるものではないわけである。

新制中学校の性格と職業指導——石山修平教授。今日の社会は民主主義を理想とし、民主化の道程を辿りつゝある社会である。従つてそこでは民主主義社会の成員にふさわしい人間を形成することを社会は学校に要求する。新制中学校の性格はこの点から決定されねばならない。その主な要素として、(1)大衆の一般の教養の向上が肝要であり、このためには(2)教育の機械均等を必要條件とするのである。教育の機会均等は封建的な社会機構の民主化を前提として、社会に教養上の階級・少数の教養階級と多数の無教養階級が存在せぬようにして教養をあまり均等化させることを本旨とする。次に(3)男女の差別教育の徹底である。このために男女共学が求められるわけである。

次に子供の精神発達段階と新制中・安校の性格をみると、六・三・三・四制は被教育者の心身の発達段階に即応した教育を考慮して実施されているということは説明を要しないところであるが六・十二才は児童期で初等、普通教育をなして基礎的陶冶をなす段階であり、十二・十五才は青年前期で中等普通教育の段階である。高等学校から大学は青年期で高等普通教育若しくは高次の一般陶冶と専門と現実性とは加えた指導として職業指導が登場して来る。職業指導は就職までの指導、就職を予想しての進路指導を意味するもので、この実施を考えた時、(1)社会科の学習において(2)職業指導の教科書によつて職業に関する見識を養ひ職業、職場の実習見学をする。即ち「学習指導要領職業指導篇」の内容を実施するもの(3)職業科の試行課程(啓発的経験)によるもの三者によつて行われる。

然し今日においては職業指導の意味が廣狭種々に解され混乱している現状である。職業、家庭科として検討されているようで新しい立場で学習指導要領で編さんされれば解明されると思うが、職業の知的理解を主とする職業指導と啓発的経験とを含む職業科と生活指導における職業指導とを区別することがよいではないだろうか。

「新制中学校および商業学校における職業指導の目標」においてI・Q・モス博士は(1)民主的教育の一般目標(2)日本の社会的経済的再建に役立つ民主主義教育(3)職業指導の職業教育に対する関係(4)指導計画における教育活動の五項について述べている。職業指導は個人が職業を選び、準備し、就職し、向上するのを助ける過程であり、適切な職業指導計画には個性調査、職業知識、就職相談、あつ旋、輔導が必要である、と述べている。

第二篇には淡路田治郎博士の職業指導の原理、増田甲一氏の進路指導、伊藤祐時氏の職業指導コースオブ・スタディについて記述されている。

第三篇職業研究には尾高邦雄助教授の職業研究の社会学的方法、藤本喜一氏の職業研究における心理学的方法、職業分析、職業統計がのつてゐる。

職業分析というのは職業なり職種を單位として、それに従事するに必要な性質能力、即ち所要性能を分析的に調査することであり、職業分析そのものは職業指導ではないが、職業指導の中心要素である（鈴木信氏）。即ち適職選択の基本的資料となるものである。

米国の労働省内にある職務分析サービズ課刊行の職分析 (Job Analysis) 手引書によると、職務分析は観察と研究によつてある特定の性質を決定しかつこれが適当な情報を提供する手續であると定義されている。即ちその職務の中に含まれる仕事 (Task)、成績の良い従業員たるに必要な熟練、知識、能力および責任、その職務が他の如何なる職務からも区別される所以のもの、これらを決めることである。

如何なる職務分析においても次の三点が根本となつてゐる。(1)その職務の実体が完全かつ正確に実証されること。(2)その職務の内容たる仕事は完全かつ正確に記述されること。(3)その職務において成績の良い従業員たるに必要な要件が指摘されることであるといつてゐる職業分析に関する資料の少い折柄、本篇はその概要を知るによい参考である。

四〇〇頁にわたり十九氏の執筆全部を紹介することは紙数に制限があり出来かねたところで、主として中学校の性格と職業科に関する基礎的な部面をとりあげることにした。他は本書によつて理解されるよう一読をおすすめする次第です。

(阿相)
発行所財団法人日本職業指導協会 定價一八〇円

あとがき

教育研修所シリーズとして第一集をおおくりいたします。

教育研修所は去る四月学校教育課の片隅に名ばかりのものが設置されたにすぎません。専任職員が一名もいない情ない状態で、したがつて研修所シリーズの計画はかれがね有つていたのですが、私共の予想よりも意外におくれて第一集を発刊せざるを得なくなつた次第です。

さて第一集は図書紹介篇といたしました。新教育の進展につれて、教育書と称せられるものが巷間には山積の狀態です。その中から比較的良書と思われれますものを題目毎に選んで、ダイジェストしたものであります。現代教育書の動向、またそれを通じて教育思潮の一端をうかがえるのではないかと思います。一人の力ではなかなかし得ないこと、それが研修所の仕事として適当なものと信じてやつてみたのであります。何分の御参考にしていただければ幸甚です。

執筆を煩わしたのは指導主事その他の方々で事務繁忙の折無理にお願ひしたため執筆者にはお氣の毒ですが各位の高覺に供するには不十分の点多々あると思ひます。第二集以後は趣もかえ。よりよいものを発刊すべく考へておりますので各位の忌憚のない批評と援助とをお願いいたします。(R、F生)

昭和二十四、一一

昭和二十四年十二月十日印刷
昭和二十四年十二月十五日發行

(非賣品)

山形縣教育委員会事務局学校教育課内

編輯兼 船 山 謙 次
發行人

山形市香澄町木ノ実小路二五八

印刷所 晃益堂印刷株式會社

山形局区内
山形縣教育委員会事務局学校教育課内

發行所 山形縣教育研修所